

自分の思いや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり

～各教科等を合わせた指導の授業設計と

授業実践を通して～(2年次/2年計画)

令和7年度 研究紀要 第46集



中学部2年 生活単元学習

「みんなでウルトラスマイル!!

秋田のじまん!調べてみよう!⑤」



小学部3年 生活単元学習

「ぐんぐんちゃれんじ おみせやさん②

～ドーナツ屋さん～」



高等部 作業学習(窯業班)

「製品を作って販売しよう

～横耀祭の作業学習製品販売会に向けて～」

秋田県立横手支援学校

目次

はじめに

校長 清水 潤

第一部 全体研究

1

第二部 各学部の実践

I 小学部の実践

11

II 中学部の実践

18

III 高等部の実践

29

あとがき

教頭 高橋 和恵

研究に携わった職員

はじめに
～ 2年間の研究を終えるに当たって～

校長 清水 潤

研究主題を「自分の思いや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり」とし、1年目は国語科、2年目は各教科等を合わせた指導を対象に取り組んできた。学校全体として、職員は児童生徒の思いや考え、言語環境を整えることを大切にし、授業をつくるようになった。児童生徒は自分の思いや考えをもち、以前よりも伝え合う姿が見られるようになった。この背景には、学校経営の基本方針として今年度掲げたことの一つ「児童生徒の思いや考えを大切にしていこう」とあると捉えている。

一方、本研究対象の授業において、「自分の思いや考えを伝え合う姿」が十分見られたか否か。それを評価するためには、児童生徒の姿を広く深く細やかに捉え、分析する必要がある。それを実現するためには、具体的な研究計画、特に授業設計に係る取組の具体化が必要であった。目指す児童生徒の姿に向けて、児童生徒の実態を生活全体から捉え、年間指導計画や単元計画を作成し、他教科等との関連を図りながら実践していくことの重要性を再認識した研究でもあった。特に知的障害のある児童生徒は、「学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場面の中で生かすことが難しい」特性があることから、不可欠である。

今年度9月、学習指導要領改訂に向けた論点整理に、「知的障害教育の各教科においては、小・中・高等学校における学びとの連続性の確保を図りつつ、知的障害の特性や発達段階等を踏まえた対応が必要である。」との一文があった。知的障害の特性や発達段階等を踏まえた対応は、知的障害教育を担う者として当然のことであり、国レベルの資料に示されたことが衝撃であったが、本校においても再認識する必要があると感じた。

来年度は新たな研究に取り組むことになるが、学校経営の基本方針に示した「児童生徒の思いや考えを大切にしていこう」は継続することから、研究の成果等を学校全体としても生かしていきたいと考えている。そして今後も、児童生徒が自分の思いや考えを相手に伝えたいようになるような授業づくり、相手に伝わったという実感を持ち、伝え合うことの喜びを感じられるような授業づくりに努めていきたい。

今年度の授業研究会では、県教育庁特別支援教育課指導主事からの指導助言や他校職員の参加をいただいた。今後も校外からの評価を受け、自らの取組を客観的に振り返り、児童生徒の成長に向けて授業力を高めていく職員集団でありたい。

本紀要を御覧いただいた皆様には、御意見や御感想をお寄せいただければ幸いです。

〈第一部〉

全体研究

自分の思いや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり
～各教科等を合わせた指導の授業設計と授業実践を通して～
(2年次/2年計画)

I 研究主題・副題の設定理由

(1) 研究主題及び1年次副題の設定

本校の児童生徒は、友達や教師との関わりや会話を楽しんでいるが、自分の思いや考えを十分かつ的確に伝えることに課題が見られる。このことから各学部経営の努力事項には、その課題解決に向けて、言語能力の育成を図る取組や言語環境の整備が挙げられている。また、本校の地域に根ざした教育活動「横手が舞台」では、育てたい力の一つに「地域について発信する」があり、目指す児童生徒の姿を学部段階ごとに示している。さらに令和6年度の読書推進計画では、「読書活動から感じたことや思ったことを伝える姿」「日常生活の中で自ら考えたり判断したりして、言葉で表現する姿」を目指す姿としている。

以上のことを踏まえ、本研究の授業づくりで目指す姿を「自分の思いや考えを伝え合う姿」とした。この目指す姿は言語能力を発揮した姿であることから、研究1年目は言語能力の育成の要である国語科を、研究対象の指導の形態として取り上げた。

なお、授業づくりにおいては、単元スパンで授業設計、授業実践、授業評価することを基本とし、チームで授業づくりすることをまとめた「横手のスタンダード」(平成28年度作成)を活用している。これまでの研究では、実態把握や単元設定、授業の構成が課題となっていることから、授業設計にも重点を置くこととし、研究1年目は副題を「国語科の授業設計と授業実践を通して」とした。

(2) 1年次の研究成果・課題と2年次副題の設定

1年次の研究では、児童生徒の「自分の思いや考えを伝え合う姿」をイメージして多角的な視点から実態把握や国語科の単元検討を行い、現在の児童生徒の姿から一つ先の姿を目指した授業づくりに取り組むことができた。また、児童生徒が安心して話すことができる雰囲気づくりや見本となる丁寧な言葉遣い、書字など、教職員の言語環境整備の意識を高めることができた。

しかし、国語科の学習グループの多くは少人数かつ教室で学んでいる。本校の教育目標にある「自立と社会参加」を目指すためには、集団や学びの場が変わっても「自分の思いや考えを伝え合う姿」を発揮できることが必要である。よって、言語活動の育成に向けて、国語科の取組や成果を他教科等に生かしていく必要がある。

2年次は、他教科の中から国語科の内容を含み、本校の教育課程の中心である各教科等を合わせた指導を取り上げることにした。中でも、多くの時間を設定し、「自立と社会参加」に向けて必要な事柄を実際の・総合的に学習する指導の形態として、小・中学部は生活単元学習、高等部は作業学習を取り上げることにした。

2 「自分の思いや考えを伝え合う姿」の捉え

児童生徒が自分の思いや考えをもち、日常生活や社会生活及び将来の職業生活に向けた人との関わりの中で、相手に分かるように言葉や身振りなど、様々な方法や手段で伝えたり、表現しようとしたりする。また、相手の話を理解しようと聞いたり、聞いて理解したりする姿。(図1)

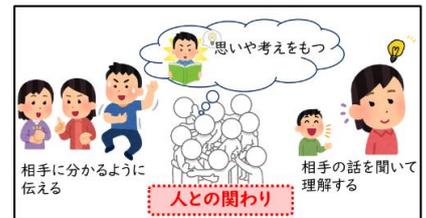


図1 「自分の思いや考えを伝え合う姿」の捉え

3 研究内容と方法・計画

(1) 研究の内容と方法

ア 各学部段階で目指す「伝え合う姿」の確認と共通理解

- ① 学部研究会での具体的な「伝え合う姿」の再検討と共通理解
- ② 系統的な「伝え合う姿」の評価と取組の全校共有

イ 児童生徒の言語能力育成に向けた共通理解

- ① 各学部に応じた「聞く・話す」のポイントやルールの再整理と共通理解、実践
- ② 伝え合う力を育む「読む」「書く」を取り入れた授業づくりの共通理解

ウ 「横手のスタンダード」を活用した各教科等を合わせた指導の授業づくり

- ① 「伝え合う姿」を視点とした授業設計の検討(単元検討会)
- ② 学部授業研究会、全校授業研究会の実施

エ 授業改善と言語能力育成に向けた職員研修の充実

- ① 全校研修会の実施と他校授業研究会等への参加・報告
- ② 言語能力育成に向けた言語環境等に関するアンケートの実施(職員対象)

(2) 研究計画

実施時期	研究会・研修会等	内容
4月	全校研究会①	・研究概要提案、意見収集、方向性の確認
	全校研修会①	・「横手のスタンダード」の確認
5月	学部研究会①	・各学部における「目指す姿」の再考と共通理解 ・学部研究の方向性の確認 ・研究対象の指導の形態と国語科の指導内容との関連の検討と共通理解
6月	学部研究会②	・研究協議方法に関する共通理解とICT研修
7月	指導主事計画訪問	・全学級、全作業学習班の略案作成と授業提示
	学部授業研究会①(高等部)	・高等部木工班の授業提示、授業研究会の実施 ・研究部報No.1による周知
	単元検討会 ※各学年、各学習グループで実施	・単元構成や目標、授業内容等の検討
8月	全校研修会②	・各教科等を合わせた指導の授業づくりについて 「言語能力の育成に向けた各教科等を合わせた指導の授業づくり ～児童生徒が自分の思いや考えを伝え合えるために～」 講師 校長 清水 潤

	学部研究会③	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究実施状況確認 ・言語環境整備に関する情報交換①(各学部における「聞く・話す」に関するルールの整理と活用)
	全校研究会②	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の進捗状況の確認と推進の方向性の共有 ・言語環境整備に関する情報提供
9月	全校授業研究会① (高等部)	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部窯業班による目指す「伝え合う姿」を引き出す授業設計と授業づくりに関する授業提示と協議(改善授業:9月18日)
	学部授業研究会② (中学部)	<ul style="list-style-type: none"> ・中学部3年生生活単元学習の授業提示、授業研究会の実施 ・研究部報No.2による周知
	学部授業研究会③ (小学部)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学部6年生生活単元学習の授業提示、授業研究会の実施 ・研究部報No.3による周知
10月	全校授業研究会② (小学部)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学部3年生・生活単元学習による目指す「伝え合う姿」を引き出す授業設計と授業づくりに関する授業提示と協議(改善授業:10月31日)
11月	学部研究会④	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究実施状況確認 ・言語環境整備に関する情報交換及び実施状況確認
	全校授業研究会③ (中学部)	<ul style="list-style-type: none"> ・中学部2年生・生活単元学習による目指す「伝え合う姿」を引き出す授業設計と授業づくりに関する授業提示と協議(改善授業:12月2日)
12月	学部研究会⑤	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究における実践の評価と共通理解
1月	学部研究会⑥	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研究における実践のまとめと今後に向けて
2月	全校研究会③	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の研究の成果と今後に向けた取組の共通理解 ・次年度の研究についての提案
3月	全校研修会③	<ul style="list-style-type: none"> ・研修報告 <ul style="list-style-type: none"> ①特別支援教育における ICT 活用に関わる指導者研究協議会報告 ②特別支援学校授業づくりプロジェクト経過報告 ③中堅教諭等資質向上研修報告

4 研究の実際

(1) 各学部段階で目指す「伝え合う姿」の確認と共通理解

ア 学部研究会での具体的な「伝え合う姿」の再検討と共通理解

目指す「伝え合う姿」を具体化するために、昨年度、表1に示すとおり整理した。これは、特別支援学校幼稚部教育要領第1章総則第3 幼稚部における教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と特別支援学校小学部・中学部・高等部学習指導要領 国語【思考力、判断力、表現力等】段階の目標(2)イから抜粋したもので、子どもたちの現在の段階や次のステップへの参考にするための指標として活用し、今年度全校研究会で確認した。

表1 目指す「伝え合う姿」の段階

幼稚部	小学部			中学部		高等部	
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
(9)言葉による伝え合い 先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語りなどに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことなどを伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。	言葉をイメージしたり、言葉による関わりを受け止めたりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつようにする。	言葉が表す事柄を想起したり受け止めたりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつことができるようになる。	出来事の順序を思い出す力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思いついたり考えたりすることができるようにする。	順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。	筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。	筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。	筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げることができるようにする。

イ 系統的な「伝え合う姿」の評価と取組の全校共有

(表1)を参考に昨年度ワークショップを行って整理した各学部段階で目指す「伝え合う姿」を、集団や場面、状況が変化しても思いや考えを伝え合えるように再検討した。(表2)

(表1)の段階を参考に検討したことで系統性が図られ、各学部の「伝え合う姿」を目指した授業実践につながっている。

表2 各学部で目指す「伝え合う姿」

小学部	中学部	高等部
<p>段階・表現方法の見直し</p> <p>教師や友達の話に関心をもって聞き、思いや考えを表現する姿</p>	<p>自分の思いや考えを学級や学年の集団の中で、相手に伝わるように表現し、相手の思いを受け入れながら聞く姿</p>	<p>生徒同士の伝え合う姿</p> <p>※各学年、学習グループ段階で、学習指導要領に照らし合わせた姿</p>

(2) 児童生徒の言語能力育成に向けた共通理解

ア 各学部に応じた「聞く・話す」のポイントやルールの再整理と共通理解、実践

昨年度、目指す「伝え合う姿」を育むために、国語科「聞くこと・話すこと」に焦点を当て、国語科の授業の中で身に付けたい力や授業内でのポイントを話し合った。小学部では「『つたえあおう』のポイント」、中学部では「伝え合う話し方・聞き方ルール」、高等部では「『聞くとき』『話すとき』のマナー」を作成し、国語科の授業の中で活用した。今年度はより活用しやすいように(表3)のように整理した。中学部、高等部では実態や段階に応じて、レベルアップした内容をまとめた。国語科や今年度取り上げた各教科等を合わせた指導の学習に限らず、学校生活全般で活用し、「伝え合う姿」における「理解しようとして聞く」ことを意識して指導に当たった。

表3 各学部の「聞くこと・話すこと」のポイント・ルール

小学部	中学部	高等部
「つたえあおう」のポイント	伝え合う話し方・聞き方ルール	「聞くとき」「話すとき」のマナー

イ 伝え合う力を育む「読む」「書く」を取り入れた授業づくりの共通理解

言語能力の育成に向けた各教科等を合わせた指導の授業づくりに関して、本校の清水潤校長の講話から、「聞く」「話す」だけではなく、伝え合う姿を目指すため「書く」「読む」という視点で考えていくことも学んだ。例えば「書く」ことで思いや考えなど思考を整理したり、発表するときの手がかりにしたりすることは、自信につながる。また、覚えたことを書いて、相手に伝えたり、学びの積み重ねとして書いておき、繰り返し読み返すことで知識の定着を図ったりすることができる。さらに、「読む」に関しては、注目した部分を指さすという行動で表現したり、読んで感じたことを伝え合ったりすることなど、伝え合う姿を育む上で欠かせない視点である。作業学習においては、作り方に関する本や雑誌を読んで、疑問に感じたことを考えたり、解決策に気付いたりし、こうしたらどうかと提案することにもつながる。「聞く・話す」だけでなく、「書く」「読む」ことも伝え合う姿を目指した授業づくりに生かすことができる。それぞれの実態に応じた「書く」「読む」を取り入れ、各学部で授業実践した。

(3) 「横手のスタンダード」を活用した各教科等を合わせた指導の授業づくり

ア 「伝え合う姿」を視点とした授業設計の検討(単元構想)

学年部または学習グループで、単元で育成を目指す資質・能力(単元目標)や、目標達成に迫るための単元構想と手立てについて話し合い、単元の「指導計画」を作成した。作成した「指導計画」を基に、学部主事、研究部員、授業者で単元全体についての検討を行った。単元検討会は、学部授業研究会3回(小学部・中学部・高等部各1回)と全校授業研究会3回(小学部・中学部・高等部各1回)の計6回行った。単元検討会の際には「育成を目指す資質・能力の三つの柱で設定された単元目標が互いに関連し、目指す児童生徒の姿が明確になっているか」「小単元(活動)の構成や学習内容が目標を達成するために適切に設定されているか」「単元のつながりや他教科等との関連はどうか」などを検討した。チームで検討を重ねたことで、単元のねらいや目標に沿った単元構成が明確になった。

イ 学部授業研究会、全校授業研究会の実施

各授業研究会では、「伝え合う姿」を引き出す手立ての工夫と児童生徒の姿や授業設計の工夫について協議を深めた。各授業研究会では児童生徒が自分の思いを伝えるために教師

の視点を絞った発問や板書の工夫、有効なICTの活用の仕方などが明確になった。また、授業設計の視点での協議や指導助言を通して、本時の授業がどのように単元全体の中で位置づけられ、これまでの経過・見通しをもつことが重要であることも共通理解することができた。

今年度は昨年度取り組んだ国語科の成果を生かし、言語環境を意識して各教科等を合わせた指導に取り組んだことで、より実際の・総合的で豊かな学びに繋がることも実践を通して明確になった。(各学部の具体的な取組や成果、今後に向けた提案は「Ⅱ各学部の取組」に記載している。)

表4 学部授業研究会及び全校授業研究会一覧

学部	授業日時	学年等	単元名	授業者	指導助言
高等部 【学部授業研究会】	7月8日(木) 5・6校時	木工班	「ベジトラグ作り」	岩澤有希子 佐藤尚人 富樫潤	朝倉紀子 教育専門監
高等部 【全校授業研究会】	9月3日(水) 3・4校時	窯業班	「学校祭に向けて製品を作ろう」	伊藤歩佳 谷藤弘美 小棚木明子 沓澤直樹	佐藤貴子 教頭
中学部 【学部授業研究会】	9月5日(火) 3校時	3年生	「結団式で発表しよう」	高橋典子 高橋勝	朝倉紀子 教育専門監
小学部 【学部授業研究会】	9月9日(金) 4校時	6年生	「なかよしランドにしよう たいしょう!」	小山耕大 高山知子 高田あづさ	朝倉紀子 教育専門監
小学部 【全校授業研究会】	10月28日(火) 4校時	3年生	「ぐんぐんちゃれじおみ せやさん②」	佐々木麗子 眞坂糸美 進藤由衣	高橋和恵 教頭
中学部 【全校授業研究会】	11月26日(水) 3校時	2年生	「みんなでウルトラスマイル!!秋田のじまん!調べてみよう!」	佐藤豪 柴田秀幸 佐々木涼子 高橋暢子 高橋陽美	特別支援教育課 山田賢子 指導主事

(4) 授業改善と言語能力育成に向けた職員研修の充実

ア 全校研修会の実施と他校授業研究会等への参加・報告

今年度全校研修会を3回実施した。(3(2)研究計画参照)

第1回目では、本校の授業づくりの基礎・基本が書かれている「横手のスタンダード」について、その説明や、全職員での共通理解を図った。今年度の研究テーマにもある授業設計に関する部分に重点を置き、授業や単元を構想する際にチームで練り合うこと、「育てる」という視点やライフキャリアの視点、学習の意味や価値を感じられる単元の構想など、基本的な授業設計について確認した。授業実践から授業の評価も含めた授業実践に関するPDCAサイクルについても確認し、チームによる授業づくりに生かした。第2回目は本校の清水校長から「言語能力の育成に向けた各教科等を合わせた授業づくり」と題し、各教科等を合わせた指導の授業実践に生かす研修を行った。講話の主な内容は次のとおりである。

**授業づくりの全体像
と基本的な考え方**

- ・児童生徒の「生活全体」を捉える。
- ・学習と生活を一体的に捉え、豊かな体験と言葉を結びつけることで、言語能力（思考力・判断力・表現力等）を育成する。
- ・言語能力を育むための土壌（環境と関係性、学習のつながり、意図的な設定、育む意欲）

**生活単元学習
作業学習の定義と
留意点**

- ・**生活単元学習**：生活上の目標達成や課題解決のため、一連の活動を組織的に経験し、自立に必要な事柄を実際的に学ぶ（児童生徒の興味・関心や生活年齢を踏まえる、見通しを持って意欲的に取り組める活動にする、集団の中で協働し、個々の力を発揮できるようにする）
- ・**作業学習**：作業活動を中心に据え、働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学ぶ（成就感や喜びを味わえる教育的価値の高い作業、地域性や社会ニーズに対応した作業種の選定、生産から消費への流れ、社会的貢献が理解しやすい内容）

言語能力育成に向けた授業づくりのポイント

- ・各教科との関連付け：生活単元学習や作業学習の中に含まれる「国語」の内容を明確にし、教科の時間との関連を図る。
- ・資源の活用：校内外の人的・物的資源や、読書の効果的な活用を取り入れる。
- ・環境の工夫：学習内容や製品を日常的に意識し、実感できるような手立てや環境を整える。
- ・連続性の確保：幼稚部からの「育みたい資質・能力」を意識し、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（思考力の芽生え、言葉による伝え合い等）を踏まえる。

上記の内容に加え、生活全体から捉える具体的なエピソードから、日常の何気ない変化や興味を授業につなげる重要性を学んだ。言語能力は安心感のある環境の中で、言葉と「体験」「動作」「事物」を意図的につなげることで、伝わる喜びを味わい、さらに表現したいという意欲が育つ。そして、生活を捉えて授業を構成し、生活へ還元するという 3 ステップにおいて、言語能力を育てるためには、「生活単元学習」や「作業学習」の中に、意識的に「国語」の要素を組み込む必要がある。これらのことを研修から学び、授業実践に生かした。

第 3 回目は研修報告を実施し、自分の思いや考えを伝えるための ICT の活用に関してや、授業づくりプロジェクトの成果等を全職員で共有し、日々の授業づくりの参考になるようにした。

イ 言語能力育成に向けた言語環境等に関するアンケートの実施（職員対象）

言語能力育成のために、授業で取り組んでいること小学部・中学部・高等部ごとにアンケートを実施した（複数回答可としている）。

表5 アンケート項目

心理的・物理的な基盤 (環境)	①安心して自分の気持ちや考えを話したり、表現したりできる雰囲気づくりをしている。 ②生活年齢に応じた言葉遣いや、分かりやすい言葉の使用など、適切で簡潔に話している。
指導の手立てと工夫 (実践)	③各学部で取り組んでいる「聞く」「話す」のルールや約束を取り入れている。 ④児童生徒の発言や表現したことを視覚化(板書する、カード等にするなど)している。 ⑤「書く」「読む」を表現活動の手段や手立てのひとつとして取り入れて授業づくりをしている。
理解の深化と継続性 (定着)	⑥言葉と体験、言葉と動作、言葉と言葉など、関連付ける場面や学習内容を設定している。 ⑦学びの積み重ねが分かるように掲示をしている。

全体を通して、実施した割合が高い取組の項目は「①安心して自分の気持ちや考えを話したり、表現したりできる雰囲気づくりをしている」であり、心理的安全性の確保を言語活動の土台として重視し、授業実践していることが分かった。また、「④児童生徒の発言や表現したことを視覚化(板書する、カード等にするなど)している」の項目も高い実施率であり、昨年度の国語科の取組を生かし、児童生徒一人一人の表現を共有するとともに、児童生徒自身が自分の表現を確認することにつながる取組をしていることが明確になった。アンケート結果から研究テーマに迫る取組がなされていることが明らかになった。

各学部の結果を割合の高い順番に示したものが表6である。

表6 学部ごとのアンケート結果

取り組み・意識している項目	小学部	中学部	高等部	全体
1. 視覚化(板書・カード等)	88.2%	92.3%	87.5%	89.5%
2. 安心できる雰囲気づくり	88.2%	84.6%	87.5%	86.8%
3. 適切・簡潔・分かりやすい言葉	76.5%	92.3%	87.5%	84.2%
4. 「書く」「読む」を表現の手段に	52.9%	76.9%	75.0%	65.8%
5. 言葉と体験・動作の関連付け	64.7%	69.2%	50.0%	63.2%
6. 各学部の「聞く」「話す」ルール	35.3%	38.5%	37.5%	36.8%
7. 学びの積み重ねが分かる掲示	44.4%	35.7%	25.0%	25.3%

アンケート結果から、日々の授業の中で言語能力育成のために意識していることは学校全体として共通していたが、学部間の連携を図るためにも小学部の土台から高等部への自立まで、どの段階で何を重点にするかを可視化して共有していく必要がある。

5 全校研究における成果と課題及び今後に向けて

(1) 成果

ア 1年次の実践を生かした「伝え合う姿」の具現化と継続した授業づくり

1年次の国語科における授業実践を通して、言語環境整備への意識向上と多角的な実態把握を行った。また授業づくりプロジェクトで作成した「国語科の授業づくりのポイント」を活用した単元検討会や評価を行いながら、「伝え合う姿」の具体化を図ってきた。

これらを受けて2年次は、各教科等を合わせた指導における、一人一人の「伝え合う姿」を具体的に話し合うことができた。授業担当者のみならず、学級や学年、学部全体で目指す姿を共通認識としてもち、授業実践を積み重ねた。その結果、児童生徒が自ら考えを伝えたり、友達の反応に応答したりする主体的な姿が見られるようになった。

また、各学部で作ってきた「聞く・話す」のルールを学部間のつながりを考えて再考した。1年次では国語科の授業に特化して活用していたが、学校生活全体で活用したことで、教師や児童生徒共により意識付けを図ることができるようになった。様式はそれぞれの学部で活用しやすいようにしているが、小学部では教師が意識して取り組みやすいように変更し、中学部では集団を意識し、基本の話し方を強調した。高等部は相手を意識した話し方、態度を継続し、より生徒が活用しやすいように様式を整えた。実態や学部の状況に応じてはいるが、小学部から高等部まで一貫した部分と段階的にステップアップした内容になっているため、全校で共通認識の下で授業づくりを行うことができた。

イ 言語能力の育成を目指した「聞く・話す」「読む」「書く」を取り入れた授業づくりと児童生徒の変容
学部に応じたツール(小学部:伝え合う姿シート、中学部:かまくらカード、高等部:表情カードや手順表)を活用し、言語環境や掲示物を整備したことが、児童生徒の安心感や見通しにつながっていた。

小学部では、「伝えたい」意欲を高めるため、DropTap や「グッドカード」、写真・絵カード等を活用し、自分の気持ちや「おすすめ」を他者に示す姿が日常でも見られた。双方向のやりとりが芽生え、教師の代弁や受容的な関わりを通じ、友達に対して「同じ」「違う」「分からない」といった意思表示をする姿が見られるようになった。

中学部では、新聞づくりにおいて、リーダーを中心に役割を分担し、相談しながら一つの物を作り上げる姿が見られた。ロイロ・ノート等での可視化により、他者の意見と自分の考えを比較し、共通点や相違点に気付く姿へと深まった。また、自分の考えに「理由」を添えて伝える意識が高まるとともに、ワークシートの穴埋めやシンキングツールを活用することで、情報を整理し、相手に分かりやすく要点を絞って発表する力が向上した。

高等部では、報告・連絡・相談の重要性を理解し、状況に応じた適切な言葉遣いや態度を自発的に選択して実践できるようになった。単なる作業報告に留まらず、作業を円滑に進めるための「こつ」を教え合ったり、改善策を提案し合ったりするなど、互いを高め合う「伝え合い」が見られた。

全校で「聞く・話す」「読む」「書く」を伝え合う姿を育む手段として意識したことで、学びの連続性が生まれ、伝えようとする意欲や意思表示、理由付けをした意見交換、集団での対話が深まったと感じる。社会生活を見据えた報告・相談など、他者と協働する姿も定着しつつあり、相手を意識した主体的な発信へつながった。

ウ 授業設計と児童生徒の変容

単元計画を立てる際に、発展的な繰り返しのある活動を設定したことで、児童生徒が見通しをもちやすく、安心感をもって学習に取り組めた。継続的な取組が児童生徒の「次はこれをすればいい」という主体性につながり、自主的な行動を引き出している場面が多く見られた。また、単元全体の流れや学習のゴールを掲示しておくことも見通しをもつための有効な手段であった。単元計画に含む体験的な活動が、より児童生徒の理解を高めた。

ICTを取り入れた単元計画、授業構成も学習意欲や主体性を引き出していた。児童生徒一人一人の実態や特性に応じてICTを活用する授業構成にすることで、自ら伝えようという意欲を強化していた。本校の教育目標である「自立と社会参加」に迫るためには、年間計画、単元計画、授業計画等全体を見通し、有効な手段や方法を十分検討することがより最適な学びになることが明らかになった。

エ 言語能力の育成に向けた言語環境に対する意識の高まり

昨年度の研究から言語環境に対する意識が高まったことで、各教科等を合わせた指導においてどの学部でも、ICT ツール(ロイロノートや音声入力)が「自分の思いを形にできる」という安心感を児童生徒に与え、言語活動を促進することができた。めあてとまとめ、Q&A 形式にした板書や完成イメージの提示により、児童生徒が「何を話せばいいか」「何を書けばいいか」を視覚的に把握できる環境が整ってきた。児童生徒の実態や言語理解に合わせた日々の授業実践の表れだったと考える。

(2) 課題と今後に向けて

ア 授業設計に対する共通認識とシステム作り

授業研究会の協議から授業設計に関して、教職員の間で共通した認識がされていないことや、よく分からないと感じている教職員が多かった。なぜこの単元を行うのか、「伝え合う姿」を育むためにどのような教材を使ってどのように単元を構成していくのかといった話し合いを十分行うことができず、単元設定の理由を明確にしないまま授業づくりを進めてしまうことがあった。どのように児童生徒の変容を授業設計に生かすかといったことも明確化できなかった。

「横手のスタンダード」にある単元や授業を構想する「練り合う」部分を生かし、教材選定や単元構成を行う「ベースミーティング」を大切にすることで、共通認識の基で授業設計する。そのために、PDCAサイクルを明確にし、時期や場面を考慮した年間指導計画を再点検するシステム作りを進めていきたい。そして、各教科等を合わせた指導の年間計画の立案、評価、改善をチームで行い、他教科等で培える力を確認しながら、いつどのように授業設計するかを研究計画に明記するようにする。

イ 般化に向けた継続的な指導と児童生徒の変容を見取る力の育成

自立と社会参加に向けて自分の思いや考えを伝え合う姿を目指して取り組んできたが、単発の授業に留まり、単元全体や年間の流れの中で、どのように学びを積み上げ、家庭や地域生活へ般化させていくかという視点で計画に課題があった。学習した力が普段の生活にどの程度生かされたのか、般化のためにどのような継続した指導が必要だったのかという検証が不足していた。どのように学習を積み重ねていくかそのツールを検討していくとともに、教師自身の児童生徒の変容を見取る力を高めていく必要があった。教師が学習の中で見取った児童生徒の表情や発言、小さな変化などからの内面の変化等を見逃さない工夫が大切であった。

どのように学習を度生かされたのか、般化のために継続した指導を続けていくためにはどうしたらよかったのかといったことを明確にするため、次の内容を研究計画に位置付け、今後を生かしていく。

- ・学びが生かされた場面や支援方法の積み重ねが分かるツールの検討
- ・児童生徒の変容をよりよく見取る力を高める授業研究会のもち方(システムづくり)
- ・実際的な場面を想定した授業構成の工夫の紹介や提案

〈第二部〉

各学部の実践

I 小学部の実践

1 児童の実態

小学部は障害の特性や身体の様子が様々な児童が28名在籍している。学習の多くは学級単位であるが、体育と音楽は低学年と高学年に分かれ、合同で行っている。また、遊びの指導や学部集会、業間運動は1年生から6年生まで合同で行っている。

多くの児童が教師や友達との関わりを好むが、意思表示については、言葉で表すことが難しく、行動や発声等で表す児童から、友達や教師と会話でやりとりする児童まで様々である。会話が可能な児童であっても、仲のよい友達と簡単な言葉でやりとりを楽しむ児童もいれば、友達にうまく気持ちを伝えられない児童もいる。

2 研究の実際

(1) 学部研究における昨年度の取組と今年度の取組

ア 小学部児童の「伝え合う姿」についての確認

昨年度、小学部の職員の話合いやアンケートから「伝え合うにも段階があるのではないか」「伝え合うには聞くことも大事」「小学部段階ではまず伝えることも含めて伝え合う姿を考えていってはどうか」等の意見が出された。

また、児童の「伝え合う」段階は、「教師と児童」から始まり、「教師の仲介による児童と児童」そして、「児童と児童」というように成長していく。児童の「伝え合う」表現方法としては、言葉、カード(絵、写真)、身振り、手振り、うなづく、拍手、姿勢(相手に体を向けるなど)、表情、指差し、発声、書き言葉等、児童によって、または場面によって様々であると確認した。

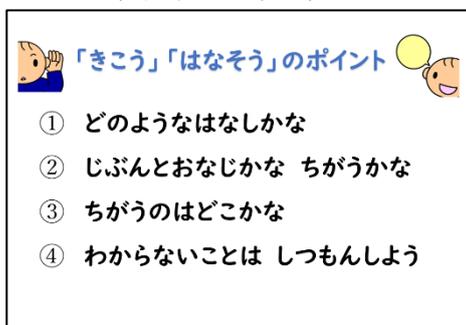
これらのことを踏まえて、小学部で目指す「伝え合う姿」を考えた。

【小学部で目指す「伝え合う」姿】

教師や友達の話に関心をもって聞き、思いや考えを表現する姿

イ 「つたえあおう」のポイントの作成と使用

(昨年度使用)



(今年度使用)



昨年度は「きこう」「はなそう」のポイントを掲示して使用した。ポイントが具体的で分かりやすく、児童自ら考えることにつながった。また、児童の実態に合わせて①の「どのようなおはなしかな」と注目することに重点を置いて使用したという学級もあった。けれども、多くは児童の実態からすると難しいところがあったという意見であった。

「平仮名が読めない」「自分で考えて発表することが難しい」などの理由が挙げられた。そこで、内容を簡単にしたり、内容を精選したりするなど、様々な児童に合わせた内容の工夫や、児童が見て分かりやすいイラストを中心とした提示の仕方が必要ではないか考え、「つたえあおう」のポイントを作成し、使用した。

ウ 「伝え合う姿」シートの活用

研究授業の授業者が、授業をする前に、1「伝え合う姿」が予想される注目してほしい場面と教師の働き掛けの工夫等、2予想される児童の「話し合う姿」を記入し、授業参観の参考にしてもらった。授業後には、3実際の授業での児童の「伝え合う姿」、4評価を授業者が記入した。

昨年度、授業の参観者からは「伝え合う姿」シートがあることによって、「授業で注目してほしい場面や支援が分かりやすく、評価に有効であった」「参観する視点が明確になり、より深く授業について考えたり評価したりすることができた」などの成果が挙げられた。また、授業者は伝え合う姿の具体を考え、整理することができたという成果があった。「伝え合う姿」が予想される場面や教師の働き掛けの工夫を具体的に考え、予想される児童の「伝え合う姿」をイメージしたことが、児童の伝え合う姿を引き出すことに役立った部分もあった。このことより、今年度も継続して使用した。

小学部 第3学年 国語科 授業研究会 【伝え合う姿】シート	
題材名「まきもの、夜あそび」 日 期：令和6年12月6日（金）9：30～10：15 指導者：朝田潤樹（T1）	
1	「伝え合う姿」が予想される注目してほしい場面と教師の働き掛けの工夫等 <注目してほしい場面> 二人で好きなものとその理由について話し合う ・教師の働き掛けの工夫等> ・好きなものを写真で示す。 言葉で話し掛け、お菓子の写真を示したり、黒板を指さすなど身振りやジェスチャーを示したりする。やりとりの例により、どこを強調して話して伝える。
2	予想される児童の「伝え合う姿」 （児童の話し合いの様子や表現しようとする姿、教師の仲介等） 友達の話を見て自分の好きなものを話す・聞く。 友達の話を見て、「どうして好きなの？」と問いかける。 好きな理由を自分の言葉で話す。
3	実際の授業での児童の「伝え合う姿」 （児童の話し合いの様子や表現しようとする姿、教師の仲介等） 相手の話を聞いて話をしたり、話の内容をしっかりと聞いて、うなずきながら相手の話を聞いていた。 相手の話を聞いて「どうして好きなの？」と自分から問いかけ、理由を聞いたときに自分で考えて答えたりして、児童二人だけで好きなものとその理由を伝え合うことができた。友達の話を見て理由を聞いた後に「そうなんだ」と思ったことを伝えることもできた。 友達の話を見て理由を聞いて、振り返って答えることができた。
4	評価（よかった点〇、改善点△） <教師の働き掛けの工夫等> ○やりとりの繰り返し良い例を動画で示し、良い方を視覚的に黒板に提示することで良いやりとりの方法を理解して進んで行うことができた。 ○児童二人でのやりとりの例、よかったところを評価したり、理由を聞いたことを伝えてもよいことを話したりしたこと、やりとりの例で、友達の話を見て理由を聞いたことで、自分で考えてより積極的に伝え合ったり、友達の話をしっかり聞いていたりすることができた。 ○メモに書き取ることで自分や友達の話したことを視覚的に確認できた。 △黒板の形と児童の位置により、高い位置の黒板を見るのが大変そうだった。 △友達の話を見て理由について詳しく聞き返してもよいことや、その理由を伝えることができた。良い理由を答えるやりとりで評価した。

エ 学級ごとの「伝え合う姿」の確認

年度当初に学級ごとに児童の現在の「伝え合う姿」について実態把握をし、1年後にはどのような「伝え合う姿」になっていてほしいか、1年後の目指す「伝え合う姿」を話し合った。年度末にどのような取組をしたか、その結果成果と課題はどうあったかを振り返った。

オ 友達の話を知りたくなるような関係づくり

「伝え合う姿」を目指す上で、児童が「話したい」「聞きたい」と思えるような児童同士の関係づくりが重要であると考えた。そこで、今年度は昨年度の取組に加えて、児童同士の関わりを大切にしたい指導にあたることを確認した。

(2) 授業づくりの実際

<小学部6年生「なかよしランドをひらこう」>

【授業設計について～単元検討会の内容】

- ・本単元では、遊びの時間や休み時間に使用している遊具をアトラクションに見立てて遊園地を作り、友達を招待して遊んでもらう体験を通して、友達に対して優しく関わったり、それぞれの役割を果たしたりする力を身に着けて欲しいと考えた。検討会では、修学旅行との関連や、関わりを引き出すための手立て、単元目標の具体性などについて話し合った。

【単元の目標】

- ・自分の役割が分かり、はさみやのりを使って招待状や看板を作る。
- ・友達が楽しめるようなアトラクションや遊び方を考える。
- ・学級や他学年の友達と関わりながら、なかよしランドを運営しようとする。

知・技

思・判・表

学・人

【研究授業】

□本時の目標（本時 5/15）

- ・なかよしランドのアトラクションで遊び、おすすめのアトラクションや楽しい遊び方を考えて伝える。

□主な活動

- ・自分で考えたアトラクションで遊ぶ。
- ・おすすめのアトラクションを選び、楽しかった遊び方を発表する。

□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と児童の姿

教師の工夫	児童の姿
<ul style="list-style-type: none">・発表の手掛かりにできるように DropTap アプリを準備する。・友達の発表を評価できるよう「グッドカード」を用意する。	<ul style="list-style-type: none">・アプリを使用して、おすすめのアトラクションを選んだり、自分の気持ちを表現したりできた。・児童同士で評価し合うことができた。

【授業研究会での主な協議内容と指導助言】

<協議内容から>

- グッドカードや DropTap など、言葉以外で意思表示ができるような手立てが充実していた。
- 児童が「おすすめ」の意味を理解できる手立てを考えたり、楽しかった遊び方を写真や文字で視覚的に分かりやすく提示したりするとよい。

<指導助言から>

- ・日頃の丁寧な習慣付けと ICT を活用した伝え合うための働き掛けが児童の落ち着きと意欲を引き出していた一方で、今後は活動場所の工夫や、授業の目的を明確に伝えるための具体的な手立ての検討が必要である。

【成果と今後に向けて～児童（生徒）の変容と有効だった支援の工夫】

- ・ICT の活用やグッドカードにより、言葉以外の手段を用いて児童同士で相互評価を行ったり、主体的に意思表示をしたりすることができた。今後はめあてに沿った振り返りに向けた支援が必要である。

<小学部3年生 「ぐんぐんちゃれんじおみせやさん②

～ドーナツやさん～>

【授業設計について～単元検討会の内容】

- ・展開部分の活動量の調整と達成感を味わえるような工夫
- ・自分の思いや考えを伝え合う観点における目標や活動内容の設定の仕方
- ・年間を通して同じ単元を3回設定したことの意義

【単元の目標】

- ・お店屋さんごっこを通して接客の手順を知り、必要なやりとりが分かる。知 技
- ・自分が作りたいものを言葉で伝えたり、複数の選択肢の中から選んだりして、お店屋さんごっこに必要なものを協力して作る。思判表
- ・教師や友達とのやりとりを楽しみながら、自分の役割に取り組もうとする。学人

【単元の概要】

- ・1学期に行った「ぐんぐんちゃれんじおみせやさん①けきやさん」の単元での課題を踏まえ、「慣れない場所でも人との関わりを楽しみ、自信をもって人とやりとりができるようになること」を目指した単元。今回は、お店屋さんごっこの店員役として接客の手順を知り、定型的な言葉やもののやりとりを通し、他学年の友達や教師との関わりを楽しむことをねらいとした。

【研究授業】

□本時の目標（本時 8/14）

- ・売るときに必要な言葉や自分の係を覚え、お客役の教師とやりとりをする。

□主な活動

- ・ドーナツ屋さんの準備、練習

「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と児童の姿

教師の工夫	児童の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・児童の言葉が伝わったことが分かるように、お客役のT2が児童の声やうなずきを見逃さず、気持ちを代弁し、即時評価する。 ・児童がおすすめのドーナツを選び、お客に紹介できるように、 ①DropTap アプリで複数のドーナツの写真と音声を準備する。 ②恥ずかしくて声が出せないのために、ポップを準備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張もあり、小声ではあったが、挨拶や注文、会計で必要な言葉を相手に聞こえる声で伝えることができた。繰り返す度に自信がつき、自分から話すようになった。 ・①～4種類の写真の中から、おすすめのドーナツを選んで指でタッチして伝えることができた。 ・②～言葉では表現できなくても、ポップを置いて自分で選んだおすすめのドーナツを伝えることができた。

【授業研究会での主な協議内容と指導助言】

<協議内容から>

- 振り返りの場面で板書や個々のめあてのカードを効果的に活用し、児童に伝わるように観点を絞って評価できるとよい。

- お客役を教師が行うことで、即時評価したり、児童の活動や思いに寄り添ったりして子どもたちが安心して練習できる環境となっていた。
- まとめの場面で、児童たちが自分で花丸カードを貼ったり、自分で考えて頑張りを発表したりすることで目標の達成感を味わうことができていた。

〈指導助言から〉

- ・直接的な指示を少なくし、発問や問い掛けを多くすることで、児童が考え、気付いて動いたり、友達や教師に伝えたりする姿が見られた。
- ・児童が発した言葉を教師が繰り返したり代弁したりすることで、児童が伝わったことを実感し、自信にもつながる。この体験を積み重ねることが、学校や家庭生活の場面で言語を介したやりとりにつながっていく。
- ・児童の実態に応じた教師の立ち位置や視線を再考し、児童が話を聞く態勢を整える。また、評価を言葉で伝えるときの伝え方、誰に対して何をどう伝えるかを明確にする。

【授業改善】

〈めあての設定と提示の仕方〉

- ・個々のめあては、児童が自分で、又は、教師と相談して決めたものを提示する。
- ・視覚的に分かるように、手順カードや個々のめあてを絵と簡潔な言葉で示す。

〈評価の仕方・伝え方〉

- ・評価を聞く場面で児童は椅子に座り、教師の話を聞く態勢を整えるようにする。
- ・児童が理解しやすいよう、要点を絞り、絵などを提示しながら評価を伝える。

【成果と今後に向けて～児童の変容と有効だった支援の工夫】

- ・導入で児童が前時までの自分を振り返ることで、児童自身が必要感のある「めあて」を立てることができた。
- ・児童が頑張る点を焦点化し、課題が明確になったことで、店の準備や接客を自分から進んで行い、客役の教師に対して、言葉で伝えようと頑張る姿が見られた。
- ・友達のよいところを見つけて、拍手で称賛する児童の姿が見られた。
- ・「○年生ともドーナツ屋さんをしたい」という意見が児童から出るなど、他学年とも関わりたいという気持ちが芽生えた。
- ・教師が話す際は、児童に伝わりやすいように文字や絵を提示しながらゆっくり話すなど言語環境を整えたことが言語理解にもつながった。
- ・児童から話し始めたときは、話し終えるまで待つようにしたことで、自分の考えや気持ちを言葉で表現しようとする様子が見られるようになった。
- ・教師が認めるだけでなく、自分の頑張りを振り返ったり、友達の頑張りをお互いに認め合ったりするための支援を考え、振り返りの場面で取り入れたい。
- ・年間を通し、同じテーマで3回設定したことで、児童が学習の流れや目標を理解して期待感をもって学習に取り組めた。回を重ねるごとに目標を段階的に設定することで、1回目で明らかになった課題を次の単元で克服するための具体的な指導計画を立てやすかった。

3 研究のまとめ

(1) 成果

ア 生活単元学習での児童の思いや考えなどを引き出す取組

- ・ 教師の手立てでは、生活単元学習の中で、児童からの質問を引き出せるように教師が一部の情報を隠して話し、児童が質問をしたら花丸シールを貼ったことで、質問への抵抗感が減り、質問が増えた。また、振り返りで、写真を提示して、児童が思い出して学習内容などを伝えられるように質問を工夫したりしたことで、学習内容や場所など気付いたことを話す姿が増えてきた。
- ・ 教材では、「グッドカード」を使用し意思表示できるようにしたり、イラストや写真などの選択肢から選べるようにしたりした。話すことが難しかったり、苦手だったりする児童が言葉以外で自分の気持ちなどを表出することに有効であった。また、マイクを使用し、



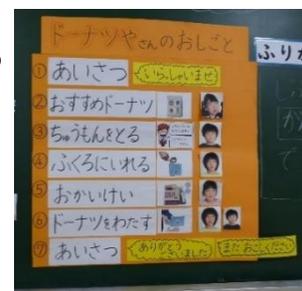
グッドカード

イ 生活単元学習での単元設定の工夫（人との関わりの広がり）

- ・ 他学年の友達を招待し、一緒に楽しめるような単元を設定し、コーナーの説明、応援などをする機会をつくったことで、他学年と言葉を交わすよい機会となった。また、他学部へ行き、用件を伝える機会を設定したことで、回を重ねるごとに緊張がなくなっていく様子が見られた。

ウ 昨年度の国語科での取組の継続

- ・ 昨年度、力を入れた言語環境の整備を継続し、話すことが伝わりやすいようにゆっくり話したり、文字や絵で提示したりした。また、言葉を大事にして板書をしたり、スライドを提示したりした。そのことが児童の言語理解につながった。
- ・ 児童の表現を待つことを心掛けけたことで、教師や友達が話した言葉を思い出して話そうとする様子が見られるようになった。また、分からないことを質問することに抵抗があった児童に対して、「いい質問」「おかげでみんなが知ることができた」という感謝の言葉を掛けることで、普段から質問をするようになった。
- ・ 友達と話し合ったり、相談したりする場面を大切にした。児童から「相談して決めよう」「〇〇さんはどう思う？」などの言葉が聞かれるようになった。児童に寄り添った指導で児童から質問したり、児童同士で話し合ったり相談したりという姿につながった。



接客手順表

エ 生活単元学習での取組が学校生活全般へ

- ・ 友達に直接質問するよう提案したところ、児童同士で質問したり答えたりするようになった。友達の意見を聞いて「同じ」「違う」「分からない」を表出するようになった。「〇〇はどうですか?」「今なんて言ったの?」と子ども同士でのやりとりが増えた。

- ・ 普段から貸してほしいときに言葉が不明瞭な児童が「伝えるシート」を使用した。早口で話す児童に「もう一度ゆっくり」「グッド」のカードを使用したことで、他者に伝わる速さに直して話すようになった。

オ 友達の話を知りたくなるような関係づくり

- ・ 友達のよさや頑張りを見付ける活動を取り入れたり、友達のよいところを即時評価したりしたことで、友達に関心をもったり、友達のよさや頑なりに気づき、認め合う言葉を掛け合うようになったりした。
- ・ 教師が児童の気持ちを代弁し、思いが伝わり、受け入れてもらった経験を大事にしたことで、伝わることのよさを児童が実感できた。また、友達同士が気持ちを伝え合った後、どうしたいのか話し合うようにしたことで、自分以外の考えを受け入れたり、気持ちの折り合いをつけたりする姿が見られた。
- ・ 生活単元学習等で他学年と関わる学習を設定したことで、休み時間には学級だけでなく、他学年の教室を歩き回り、他学年の友達とも遊ぶようになった。

(2) 今後に向けて

ア 様々な児童に対しての「伝え合う」ための支援

- ・ 多くの児童により変化が見られたが、一部では自分にとって、思いがけない場面で話し掛けられたり、質問されたりすると戸惑って返答に困ってしまう児童もいる。また、質問の内容が分からないと黙ってしまったり、ごまかそうとしたりする児童もいる。「分かりません」と話してよいことなど、児童の育ち全体を見て、指導していく必要がある。「伝え合う」ための前段階の支援が必要な児童に対して、細やかな手立てを講じていきたい。

イ 「つたえあおう」のポイントの活用

- ・ 実態が様々かつ習熟度も異なるため、「つたえあおう」のポイントを活用することが難しかったという意見があった。実際に児童の支援に使用するよりは、教師の意識付けに留まってしまったように感じる。しかし、個に合った支援の仕方を教師間で考えて、学級ごとの工夫が見られたので、学級ごとの工夫を情報共有し、指導に役立てていくことができるようにしていければと思う。



ドーナツやさんの練習



振り返り

Ⅱ 中学部の実践

1 生徒の実態

中学部は1年生8名、2年生9名、3年生9名が在籍している。各学年2学級に分かれているが、学年合同で学習することが多い。

意思表示については、発声で自分の感情を伝えようとする生徒、発語が少ないものの教師からの言葉掛けにタブレット型端末を使って自分の意思や感情を表現する生徒がいる。さらに、実態差は大きいですが、友達や教師と簡単な会話でやり取りしながら自分の考えを深めることができる生徒等、対話でのやり取りが可能な生徒が多い。しかし、生活経験や語彙力の不足から自分の考えを整理して伝えられない生徒や、改まった場面で話すことが苦手な生徒もいる。

人との関わりについては、集団での学習に参加することが難しい生徒はいるが、友達とのやり取りや集団での活動に意欲的に取り組もうとする生徒が多い。学習の中で生徒同士が話し合い、意見交換をする場面では、どう伝えていいのか分からなかったり、相手の意見を肯定的に受け取ることが難しかったりする生徒が多いことも課題である。

ICTの活用に関しては、タブレット型端末を使用することが多く、学びや考えを整理したり、整理した情報を伝えるために活用したりするなど、経験を重ねている。自分の考えを整理したり、伝えたりする有効な手段の一つとなっている。

2 研究の実際

(1) 学部研究における昨年度の取組と今年度の取組

ア 中学部における目指す「伝え合う姿」の共通理解

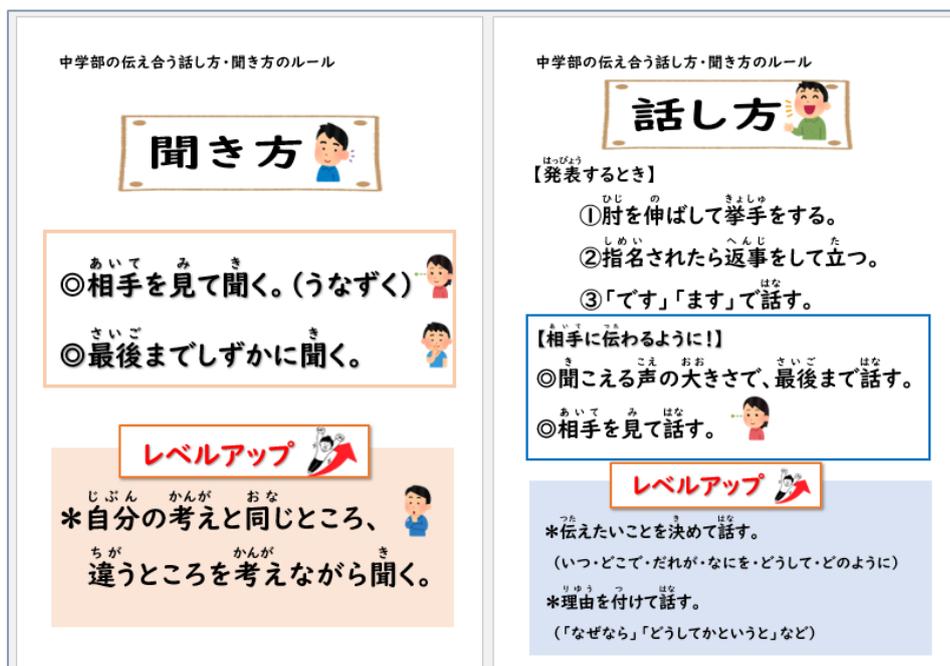
各学年における目指す「伝え合う姿」のイメージについて話し合った。どの学年においても「伝える」だけではなく、相手に「伝わる」話し方や相手の話を「聞く」態度が課題として挙げられた。また、相手の考えを知ろうしたり、自分の意見と比較したりしながら聞くことを目指す学年もあった。そこで中学部における「伝え合う」姿を次のように考え、研究を進めていくことにした。

～中学部で目指す「伝え合う」姿～
自分の思いや考えを学級や学年の集団の中で相手に伝わるように表現し、
相手の思いを受け入れながら聞く姿

昨年度の国語科の「伝え合う姿」を基盤に、今年度は学級や学年など、集団が大きくなった中で「伝え合う姿」を目指す。ここでの「表現」とは、「話す」「書く」など気持ちを伝える方法とし、「相手の思いを受け入れながら」とは、相手の表現に対してリアクションしながら聞く、肯定的に捉えるなどと考え、学部で共通理解して取り組んでいる。

イ 伝え合う話し方・聞き方のルールを活用

言語環境が整うことで、自分の考えを伝えたり、相手の思いを受け止めたりする基盤ができると考えた。そこで昨年度作成した「中学部の伝え合う話し方・聞き方のルール」(図1)を継続して使用することにした。これは「横手支援の付きたい習慣」を基に作成している。昨年度と同様の内容だが、【発表するとき】の流れを整理し、よりよい発表の仕方の定着を図ったり、発表への抵抗感を減らしたりすることを目指した。各学年、学級の実態に応じて、机の横に下げたり、教室に掲示したりして、すぐ見られるようにした。



(図1) 「中学部の伝え合う話し方・聞き方のルール」

ウ 「かまくらカード」の活用

研究を進めていく中で、昨年度から授業の中で伝え合う場面、やり取りする場面を想像したとき、「会話すること」「話し合うこと」のイメージが先行してしまうのではないかという疑問が挙げられた。そのため、昨年度はこれまでの振り返りの場面で活用していた「かまくらカード」(図2)を、伝え合いたいことが明確になるように視点を絞ったり、授業で分かったことを伝え合ったりするためのツールとして、授業の展開の中でも活用することにした。「かまくらカード」を活用することで、自分の思考を整理して伝え合いができ、他者と考えを共有しやすくなるのではないかと考えた。今年度は「かまくらカード」の考えを基に、自分の意見を伝えるために「書く」ツールとして活用することとした。これは相手に分かりやすい文章を書くということではなく、自分の思いを書き出したり、自分の考えに自信をもって発表したりするための活用ということを、学部で共通理解して取り組んだ。

振り返りキーワード

月 日 () **かまくらカード**

か **かんが**
考えたこと

例：国語
○友達の意見を聞いて考えたことを書こう！
○登場人物の気持ちと同じ気持ちになったことはないか考えて伝えよう。

例：生単
○横手市の有名なものについて、食べ物以外で調べたいことを書いてみよう。

日付： **かまくらカード**

ま **まな**
学んだこと

例：○○について、◆◆と分かった。
○○について、□□ができた。

・学びの変容を振り返る	「○○が分かった。」 「○○ができるようになった。」 【例】「登場人物の気持ちを読み取るには、その言葉や行動に着目すれば読み取れることが分かった。」
・学びの過程や結果を振り返る	「○○することが分かった。」 「○○することができるようになった。」 【例】「いくつかの資料を比較して読むことで、江戸時代の農民と武士の生活の様子分かった。」

日付： **かまくらカード**

くら **くら**
比べたこと

例：友達の意見と比べて、●●だと思った。
☆☆と■■を比べて、☆☆を選んだ。

・交流を振り返る	「○○な考えもあるんだ。」 「Aさんはなぜ、こう考えたのだろう。」（「問い」） 【例】「最初はAさんの考えに反対だったが、話し合いを通して、Aさんの考えが少し理解できるようになった。しかし、自分は○○なので〜。」 「(サブ)は 上から打つ方が絶対いいと思っていたけれど、作戦タイムを通して、いろいろな打ち方を試してみようと思った。」
----------	---

(図2) 「かまくらカード」例

エ ICTを活用した学部授業研究会の実施

昨年度に引き続き学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」(以下「ロイロノート」)を活用して学部授業研究会を行った。参観の視点を「話す」「聞く」「言語環境」で色分けし、他グループの話合いも共有できるようにした。(図3)

【参観の視点】

【話す姿】 (またはそれを引き出すための教師の手立て) ※ ピンク【話す姿】 自分の思いや考えを伝えるように表現している姿	【聞く姿】 (またはそれを引き出すための教師の手立て) ※ 水色【聞く姿】 相手の思いを受け入れながら聞いている姿	【言語環境の整備】 ※ 黄緑【言語環境の整備】 言葉の使い方、言葉の視覚化、板書の仕方、掲示物の工夫など	【改善案】 ※ 黄色【改善案】
--	--	--	----------------------------------

<中学部3年「STEP UP3年生～結団式で発表しよう～」>

生徒の姿・教師の手立て 改善案

導入

「おはようございます!」
「今日は、おはようございます!」
「おはようございます!」

展開

「自分の意見を言うことで自分の考えを深めることができる。」
「自分の意見を言うことで、自分の考えを深めることができる。」
「自分の意見を言うことで、自分の考えを深めることができる。」

終末

「2年間の積み重ねが感じられる。」
「2年間の積み重ねが感じられる。」
「2年間の積み重ねが感じられる。」

視点があがることで
考えが深まる!

いろいろな意見をとり入れられる。
人の意見への関心

あまり深入りしないで、
意見を出せたことを大切に

(図3) グループ協議の視点及び協議シートの抜粋

(2) 授業づくりの実際

< 中学部 3 年生 「STEP UP3 年生 ～結団式で発表しよう～」 >

【授業設計について～単元検討会の内容】

修学旅行の五つの約束について、自分の生活を振り返ってどのように行動したらよいか具体的に考えるための手立てやその理由を考えるための教材について検討した。

【単元の目標】

- ・ 修学旅行の約束や公共のルール、集団で行動することの大切さを知る。 知・技
- ・ 修学旅行の約束や友達の意見を参考に、具体的な場面をイメージしながら自分の目標を決める。 思判表
- ・ 修学旅行の結団式に向けて、グループで協力したり、意見交換したりしながら準備を進めることでみんなが楽しめる修学旅行にしようとする。 学 人

【研究授業の実際】

□ 本時の目標（本時 5/9）

- ・ 修学旅行の約束から具体的な場面を考え、自分の意見や感想を発表する。

□ 主な活動

- ・ どんな約束があったか考える。
- ・ 具体的にどんな場面でどうするかを考える。
- ・ 「なぜなら」を使って自分のこととして理由を考えて記入し、発表する。

□ 「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫	生徒の姿
<ul style="list-style-type: none">・ タブレット型端末の約束シートに自分の考えを「なぜなら」を使って記入するワークシートを準備する。・ 発表内容に注目できるように、モニターにワークシートを映す。	<ul style="list-style-type: none">・ 約束事に対して、どんな場面でどのような行動をしたらよいか考えて記入していた。・ 発表者は、自分が記入したワークシートを見て自信をもって発表することができた。また、友達の意見をモニターや共有ノートを見て共感したり、自分と比較したりすることができた。

【授業研究会での主な協議内容と指導助言】

< 協議内容から >

- 「なぜなら」を使って理由を付けることで、自分のこととして捉え、考えを深めることができた。
- タブレット型端末でシートを共有することで、友達の意見を参考にしたり、自信をもって発表したりすることにつながった。

- 振り返りについて、生徒の発言を一人でも取り上げたり、生徒の言葉でまとめたりするとよい。
- かまくらカードの「ま（学んだこと）」を使用したが、友達の見聞を聞いて学んだことを発表するよりも、友達の見聞に「なるほど」と思ったことをかまくらカードの「くら（比べたこと）」の形でまとめ方が分かりやすい。

〈指導助言から〉

- ・自分の考えや思いをもつための自分のこととして捉えられる仕掛けづくり（手立て）が見られた。「なぜなら」というこの一言が自分のことに引き込む仕掛けだった。
- ・「どんな場面で何をやる」という問いがあったので、日程や行き先をはじめから提示しておき、場面を限定することも考えやすさにつながる。
- ・まとめの場面で「かまくらカード」と連携させていてよかった。「『なるほど』と思いました。」という発言で終わらせず、どう思ったか問い返す→思いを伝える→全体に広げるといふ流れができるとよい。

【成果と今後に向けて～生徒の変容と有効だった支援の工夫】

- ・約束を具体化することで、実際に修学旅行に行ったときに守るべき約束として実行することができた。
- ・「なぜなら」を使う場面を意図的に設定することで、生徒は理由を考えながら話すことが増えた。今後も、様々な学習活動で自分の意見を深く考えて話せる場面を増やしていきたい。
- ・生徒の意見をより深く聞き取るために、問い返す場面を高等部受検の面接練習等に取り入れていきたい。



振り返りの場面での「かまくらカード」の提示



「なぜなら」を使ったワークシートの記入と発表

< 中学部 2 年生 「みんなでウルトラスマイル!!
秋田のじまん！調べてみよう！⑤」 >

【授業設計について～単元検討会の内容】

- ・単元全体の目標と小単元の目標のつながりについて検討、整理した。
- ・課題とまとめのつながりのもたせ方や肢体不自由の生徒の学習活動について検討した。

【単元の目標】

- ・「秋田のじまん」に関する調べ学習を通して、秋田県の観光資源や特産物、伝統行事等に関する文化や歴史、特徴を知る。 知・技
- ・グループの友達や教師と話し合いながら調べたことを新聞にまとめたり、分かりやすく発表したりする。 思判表
- ・調べ学習や発表活動等を通して身に付けた表現方法を用いて、友達同士、あるいは教師とやり取りしながら課題を解決しようとする。 学 人

【単元の概要】

「秋田のじまん」に関する調べ学習をもとに、グループごとに新聞づくりを行い、完成後は他のグループに向けた発表活動に取り組む。年間で五つの単元を設定し、3グループで計15枚の新聞づくりを行った。最終の単元では、これまでの学習活動に加え、高等部や中学部他学年の生徒を対象とした秋田のじまんクイズ大会を開催したり、プレゼントのバッジづくりを行ったりする。また、昨年度の横手のじまん新聞と合わせた秋田のじまんガイドブックづくりも行う。

【研究授業の実際】

□ 本時の目標（本時 2/21）

- ・自分の役割が分かり、グループの友達や教師と新聞づくりに関する意思や意見を伝え合いながら活動に取り組む。 思判表 学 人

□ 主な活動

- ・全国の観光地や特産物、地理関係などと比較したり、位置関係に興味をもったりする機会につなげることを目的とした「日本のじまんクイズ」の実施。
- ・グループごとの調べ学習をもとにした秋田のじまんに関する新聞づくりとリーダーによる進捗状況の報告。

□ 「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫	生徒の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の課題を示す際に、本時のゴールを考えることができるように、始めにまとめの穴埋め文を提示する。 ・ 友達や教師に的確な言葉で提案したり、同意を求めたりできるように、必要に応じてロールモデルを示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題を示す際に、まとめにつながるキーワードを引き出したことで、まとめでは自分の考えをスムーズに話す生徒が多く見られた。 ・ 他の学習場面でもロールモデルを行ってきたことで「このテーマはどう思う？」など、生徒たち同士でやりとりする場面が多く見られた。

<ul style="list-style-type: none"> ・ 肢体不自由の生徒が画面を見ながら自分の選択を発声で伝えられるように、モニターを設置したり、スイッチ機器を活用したりする。 ・ 発表の際の参考になるよう、かまくらカードの「か（考える）」の視点を基に、ロイロノートで穴埋め文にしたものをモニターに提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ スイッチ機器を押すごとに、モニターの映像が「きりたんぼ」のイラストに近付いていくことで、笑顔で声を出しながら教師とやりとりする姿が見られた。 ・ やや発表に時間が掛かる生徒も見られたが、自分なりに考えた答えをみんなの前で話すことができていた。
---	--

【授業研究会での主な協議内容と指導助言】

<協議内容から>

- 個に応じた ICT 機器を活用しており、タブレット型端末の操作に関しても生徒たちは慣れていた。
- 授業者がイメージする「話し合い(個別に相談)」と参観者がイメージする「話し合い(集団での話し合い)」の認識がやや異なっていたことから、話し合いをする姿に関する協議が多く、話し合う場の設定や話し合いを深めるための改善案が多かった。
- 授業の時間配分に関しては、「日本のじまんクイズ」を扱わず、秋田のじまんに関連する学習内容のみで構成してもよいのではないかという改善案もあった。

<指導助言から>

- ・ スイッチ教材ややり直しが何度もできるロイロノート上の色塗りなど、自立活動の視点から ICT を効果的に活用していた。
- ・ 香川県の「讃岐うどん」を引き出すためのヒントなど、新たな知識と既存の知識を結び付ける言葉掛けがよかった。
- ・ 本時のゴールを考えることができるよう、課題とともにまとめの穴埋め文を提示したことで、生徒たちも考えやすかったと感じた。
- ・ 魅力的な新聞にするための「話し合い」を課題にするのではなく、魅力的な新聞にするための方法と結果をまとめにつなげる方が生徒たちの発言を引き出しやすいのではないか。
- ・ 県北、中央、県南の食べ物など、一つのテーマに絞って比較することで、特色や地域における違いがより分かりやすくなるのではないか。
- ・ 竿燈まつりや大曲の花火に関する新聞を夏休み前に作成することで、生徒たちが実際に出掛ける体験にもつなげられるのではないか。
- ・ 生徒自身が「伝えたい」という思いをもつことや伝えたことが「伝わった」という実感を得られることが大切である。他の場面でも伝えたいと思えるような授業づくりを引き続き進めてほしい。

【授業改善】

<課題とまとめの整合性を図るために>

- ・ 魅力的な新聞にするための「話し合い」を課題にするのではなく、魅力的な新聞にするための方法と結果をまとめにつなげた。

<活動時間の確保と伝え合いをさらに深めるために>

- ・50分間の授業の際は、「日本のじまんクイズ」は実施せず、もっとよくするためのアイデアを出し合う場を設定し、全体でグループの新聞を見合う時間を作る。また、グループでの活動前に、リーダーを中心に何をどう改善するか、自分の思いや考えを伝え合ったり、互いに役割分担したりする場面を設定する。

【成果と今後に向けて～生徒の変容と有効だった支援の工夫】

<生徒の変容>

- ・新聞づくりに係る学習活動の流れを繰り返してきたことで、新聞づくりに掛かる時間が短くなったり、自分たちで相談してレイアウトを考えたり、魅力ある新聞にするために自分たちでアイデアを出し合ったりするようになった。
- ・新聞が完成後の発表活動では、リーダーを中心にグループの友達同士で相談して担当を決め、要点を絞って発表内容を決めたり、発表時間を意識して発表したりするなど、個々の生徒やグループ全体に成長が見られた。
- ・以前は人前に立つと緊張して話ができなくなったり、分からないときに周りの人に聞けなかったり、あるいは集団活動そのものに苦手意識を示したりしていた生徒も、新聞づくりや発表活動における友達や教師との関わりを通して、少しずつ自分の課題を解決できるようになってきた。
- ・1年生のときの「横手のじまん」に関する学習と、今年度の「秋田のじまん」に関する学習を通して、自分たちが住む郷土への知識が深まった。秋田に関する様々な情報がつながってきており、自分が分かったことを伝えたいという気持ちが高まっている。次年度は、今年度までの学習や学びを生かし、「日本のじまん」の調べ学習につなげ、日本の中の秋田県、あるいは全国の中の横手市を考える機会を作っていきたい。

<有効だった支援の工夫>

- ・「〇〇を〇〇するともっとよくなるよ」等、お互いにアドバイスができるように、文字と写真のバランスや大きさ、配置、全体の構図などに関するポイントを提示し、全員で新聞を見合う機会を定期的に設定した。
- ・インターネットを使用した調べ学習がスムーズに進められるよう、読みづらい漢字が複数ある場合は、文章ごとにロイロノートのカードにコピーして、読み上げ機能を活用した。文章を読むことが難しい生徒も聞くことで内容を理解し、自信をもって活動に取り組むことができた。また、新聞づくりを行う上で、Google 検索のAIモードを使って、端的に内容を表示する方法も有効だった。
- ・Canva アプリのテンプレートを新聞づくりの見本として提示し、写真と文字を削除したテンプレートを使用したことで、基のデザインや構図を参考に、より完成度の高い新聞づくりにつなげることができた。また、身近な人からの客観的な意見を新聞づくりに生かせるよう、他学年の生徒にアンケートを実施した。「〇〇がとてもしかりやすかった」、「〇〇に行ってみたいと思った」など、アンケートに書かれている内容を見て喜んでいる生徒が多く、生徒の達成感を引き出すことができた。

3 研究のまとめ

(1) 成果

ア 生徒の伝えたい思いと受け取る意識の高まり

- ・「話し方・聞き方のルール」を活用し、指導を継続したことで、「丁寧な言葉遣いで話す」「相手に伝わる声の大ききさで話す」などの話し方や「相手を見て聞く」「最後まで聞いてから質問する」などの聞き方の態度面が整ってきた。教室に掲示したり、机の横に下げたりすることで、視覚情報としてすぐに確認できた。また、根拠を示すことで納得して取り組む生徒もいた。
- ・聞く力が身に付くことにより、相手の意見に同意したり、自分の意見と比較したりできるようになった生徒もおり、知識の定着や学びの深まりのきっかけとなった。話す側としては、相手がうなずく、リアクションをするなど、自分の話を聞いてくれているという実感が、より伝えたい気持ちの向上につながったと考える。

イ 言語環境の整理と国語科とのつながり

- ・年度当初に言語環境の整備でどのようなことを意識しているかアンケートをとった。「安心して話せるような人間関係の形成」や「正しい言葉遣い」を意識している教師が多かった。年度途中で同じアンケートを行うと「学びの積み重ねが分かる掲示物」や「適切な話し言葉で話す環境づくり」を意識している教師が年度当初より増加した。生徒は学びの経過や積み重ねが見て分かることで、自信や意欲をもって学習に臨めるようになってきたと考える。
- ・学んだ言葉の意味を提示したり、板書の内容を整理したりするなど、昨年度の国語科における研究の成果を生かした言語環境の整備を行った。さらに、発言や気付きを板書し、言葉を視覚化したり、モニターで意見を共有したりすることは大いに有効であり、板書計画や丁寧な書字を意識することができていた。
- ・話し方に関しては、「なぜなら」と理由を付けて話したり、5H1Wを基に伝えたい内容を整理しながら話したりする生徒が増えた。さらに、生徒が表現したことが相手に伝わるよう、教師が仲立ちをして言葉を引き出したり、問い直したりすることで、「伝えよう」とする意識が高まってきた。どのように伝えるか、どんな思いや考えを伝えるかなど整理することで、より学習に対する意欲や主体性が向上したと考える。

ウ 他の学習場面への派生

- ・「中学部の伝え合う話し方・聞き方のルール」を提示し、学部全体で共通理解して取り組んだことで、生徒たちは生活単元学習の授業以外でも話し方や聞き方を意識するようになってきた。読書月間・週間の期間中に中学部が取り組んでいるビブリオバトルでは相手に本のよさを伝える方法を考えたり、聞く側もどの本に投票するか集中して聞いたりしていた。また、作業学習製品販売会での接客の仕方や職員室の入退室の仕方など教育活動全体を通して成果があった。

エ 対話による学び合いやICTの活用

- ・今年度もロイロノートを活用した授業づくりを行う学習グループが多かった。書字に時間が掛かる生徒への工夫として、音声入力をしたり、穴埋めのワークシートを提示したりするなど、思いや考えを表現するために活用することができた。
- ・共有ノートを使用し、友達と協力して一つの物を作り上げたり、シンキングツールを思考の整理に活用したりした。板書や掲示物と併用し、言葉を視覚化することで相手の考えを共有しながら、自分の考えと比較するきっかけにもつながった。
- ・(図3)のように、学部研究会においてもロイロノートを活用して、グループ協議や学年部での話し合い、アンケートを行った。他グループの協議内容やアンケート結果をいつでも、すぐに共有することができ、効果的な活用方法であった。

(2) 今後に向けて

ア 思いを引き出す仕掛け

- ・生徒はワークシートやタブレット型端末等を活用し、自分の思いや考えを伝える経験を積み重ねてきた。今後は「なぜその考えになったのか」という問い直しや生徒の思いをよりの確に引き出す言葉掛けや仕掛けが、さらに必要になってくると考える。「ここまで伝えたら相手が分かってくれた」「詳しく話すといい」など、伝える楽しさや伝わった喜びを得られることで、学びの定着や意欲にもつながると考える。

イ 「かまくらカード」の活用

- ・視点を絞った伝え合いや思考整理のためのツールとして「かまくらカード」を活用してきた。振り返りでは、「次は〇〇したい」「□□さんと比べて▲▲だと思った」など、学びのステップアップや蓄積につながった。また、考えを書く場面を設定することでじっくり考える時間を確保することができた。個に応じてロイロノートで入力したり、ワークシートに記入したりするなど柔軟に活用ができた。
- ・一方で、振り返りの場面で使用しているツールのため、他の場面での汎用性が低かった。「かまくらカード」としては今後も振り返りの視点を提示するツールとしての活用が分かりやすいだろう。
- ・「かまくらカード」の視点は「考えたこと」「学んだこと」「比べたこと」であるため、授業づくりの考え方のベースになっている。「秋田の探究型授業」の基本プロセスを参考に「かまくらカード」の考え方を活用する方法を模索することができると考える。

ウ 日々の学習や他教科等とのつながりを意識した計画

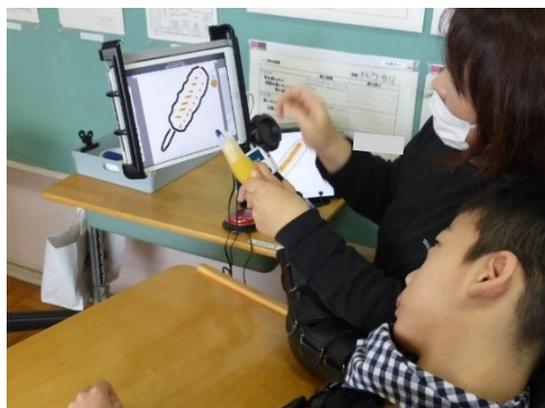
- ・単元の系統性や実施時期などを計画していく上で他教科等とのつながりを意識していきたい。生徒の目指す姿や育てていきたいポイントを定期的に話し合う場面が必要である。各教科等の年間指導計画を評価する時期や夏季休業中などに他の教科等に生かせる点や強化したい点を話し合う機会があると、より生徒の実態に沿った指導や授業設計が可能になると考える。また、日々の生徒の様子からも変容を読み取り、柔軟に計画を修正したり、発展性をもたせたりすることが重要だと考える。

エ 学びや伝え合いのさらなる般化

- ・昨年度に引き続き、今年度も教師と生徒、生徒同士の適切な言葉のやり取りや板書や掲示物の工夫を意識して取り組んできた。今年度は学級や学年の生活単元学習の場面での取組だったが、他の教科や合わせた指導等でも成果が見られている。今後も様々な学習グループでの学習活動や日々の生活、他教科等との関連付けがさらに必要だと考える。
- ・考えをまとめたり、伝えたいことがあっても表現することが難しい生徒への対応、効果的なグループ編制なども模索していく必要がある。場面や状況が変化しても、自分の思いや考えに自信をもって伝えたり、相手の思いを受け入れたりする経験を積み重ねられる環境を今後も整えていきたい。



まとめにつながるキーワードを引き出す発問



自分の選択を伝えるためのスイッチ機器の活用



グループのリーダーによる進捗状況の報告

Ⅲ 高等部の実践

1 生徒の実態

現在、高等部には訪問教育を含め 33名の生徒が在籍している。見聞きしたことや自分の経験、考えなどを話す生徒、言葉での表出は少ないものの表情や発声、身振りなどで意思表示をする生徒など、実態は様々である。また、大多数の生徒が、ICT 機器を有効活用している。具体的には、タブレット型端末でワークシートや作業日誌に入力したり、動画の視聴を通して学習内容に関する知識や理解を深め、自分の意見やさらに調べたいことへの気付きにつなげたりする場面が日常的に見られる。また、既習事項を実生活と結び付けてすぐに実践することは難しいが、繰り返しの学習や実体験の中で定着、般化が図られる生徒が多く、段階的で系統的な学習計画を立てることが有効である。

1年次の国語科を中心とした研究の成果は、生徒が自分の考えや友達の発表に対する感想を伝えたり、互いの話を聞くときの適切な態度についての実践を重ねたりすることができたことである。教師が学習環境を整えることで、生徒が活動に見通しをもち、主体的に学習に取り組むことができたためだと考えられる。中でも、学習の流れが分かりやすく提示された板書や実態に合った ICT の活用、話し方や傾聴姿勢についての具体的な指導などが効果的であった。

国語科の学習を通して身に付けた語彙や表現、話し方、話を聞くときの態度・マナーなどを他の学習場面で生かすことが次のステップである。そのために、生徒同士が自分の考えを伝え合い、互いを認め合ったり、協働したりする場面の設定が必要である。また、会話における適切な態度の定着を図るための支援や手立ても検討したいと考えた。

そこで、2年次の今年度は、作業学習を研究対象授業とし、より実践的に取り組むことにした。高等部では、週8時間設定している学習であり、生徒の実態に即して、繰り返し、継続的に学ぶことができる。また、作業内容や友達との関わりにおいて、長期的に、また、段階的に学習内容を設定することも可能な学習でもある。友達や教師との実際の関わりの中で既習事項を生かすこと、また、その実践に対する評価を重ねることで、確かな知識と適切な人間関係の形成へとつなげたいと考えた。そして、生徒がそれぞれの方法で伝える力を身に付け、社会生活の中で生かしていくことを目指した。

2 研究の実際

(1) 学部研究における昨年度の取組と今年度の取組

ア 作業学習を通して目指す生徒の姿の共有

第1回学部研究会では、生徒に身に付けさせたい力の整理を行った。昨年度、国語科の授業における研究では、学習グループとしての実態や段階を基に、伝え合う姿の目標やそのための支援について考えた。その際、学級を越えて編制された学習グループがあり、授業者と担任間での生徒の情報共有も行った。学習グループとしての目標を設定するためには、生徒一人一人の実態や国語科以外での授業の様子、担任の願いなどを共有することが必要であった。作業学習も、学年、学級を越えたグ

ループで編制されているため、高等部全体で、生徒の目指す姿を共有することから始めた。

作業学習の班編制の際には、年度初めに、担任が生徒の実態を基に、身に付けさせたい力を精査し、本人の希望や保護者の願いなどと照らし合わせながら考える。そこで、担任が考える身に付けさせたい力を書き出すことから始めた。研究部で準備したロイロノート内の様式に、担任がねらいを入力し、学部研究会でそのデータを基に、作業班の担当者が、生徒の年間目標を考えた。

各作業班に必ずしも担任が配置されるわけではないため、願いのすり合わせは意義のある取組となった。ロイロノートで情報共有したことで、学部研究会後も教師が各自のタブレット型端末から必要に応じて見返すこともでき、単元が変わるごとに目指す姿を再確認するなど、その後の活用にもつながった。(図1)

図1 作業学習を通した目指す姿シート <5月>

生徒A 【作業班】2年

〈担任の願い〉

- 作業製品の名称や用途が分かり、担当する作業工程や使用する道具を覚える。
- 目標個数の達成を目指して正確に、丁寧に作業する。
- 報告、連絡、相談を通して、周りと適切なコミュニケーションをとりながら作業する。

↓

〈今年度の目標〉

【意欲/態度/習慣面】
約束やマナーが分かり、周りと適切なコミュニケーションをとりながら作業をする。

【理解/知識/技能面】
判断基準を理解し、適切に作業を行う

イ 作業学習における「伝え合う姿」の整理

第2回学部研究会では、作業学習における「伝え合う姿」について確認した。昨年度の国語科の授業は、教師が一人で進めることが多かったが、作業学習は、一つの作業班に複数の教師が関わる。そのため、一貫した指導や関わり方が求められる。生徒のどのような姿を「伝え合っている」と捉えるかについては、教師それぞれの見方があり、それらを共有し、積極的に見取ることは、生徒のよさに気づき、評価するための視点をもつことにもつながると考え、話合いの場を設けた。

作業学習における「伝え合う姿」について考えたとき、言葉でのやりとりと言葉を伴わないやりとりがあることに思い至った。挙げられた「伝え合う姿」は次のとおりである。(表1)

表1 作業学習における「伝え合う姿」の整理 <6月>

言葉でのやりとり:生徒同士、教師との対話
・作業完了や失敗の報告
・作業中に迷ったとき、助言を求めるための相談、話し合い
・生徒同士の教え合い、助言、作業の引継
言葉でのやりとり:掲示物
・目標の掲示
・タイムスケジュール、手順表
・役割分担表
・出来高表
言葉を伴わないやりとり
・称賛や励ましを表す身振りや合図、拍手
・視線、表情、姿勢、態度
・手本の提示、演示と模倣

様々な表出の仕方や受け取り方があることを共有したことで、「伝え合う姿」の捉えの幅が広がった。また、「伝え合う姿」を再確認したことで、生徒それぞれのよさを積極的に見取るための視点が整理できただけでなく、教師の関わり方や支援、手立ての選択肢を増やすこともできた。

ウ 生徒の目指す姿に迫る授業設計

第4回学部研究会において、年間指導計画や単元計画の視点から、前期を振り返り、後期に取り組みたいことを作業班ごとに話し合った。

昨年度は、一つの授業に絞らず、高等部の国語科の全授業を互いに参観する形で、学部授業研究会を行った。複数の授業を参観したことで、板書や教材の工夫、ICTの活用など、具体的な指導方法や支援について、互いに学ぶことができ、多いに参考になったという意見が聞かれた。一方で、その授業の単元計画上の位置付けや年間指導計画の意図などについては着目することは少なかった。そこで、今年度は、研究テーマの副題にも示されている授業設計の視点からも、効果的な授業の在り方について迫りたいと考えた。

各作業班の話し合いでは、生徒が前期で身に付けた力や後期の目標から年間指導計画を見直し、単元の目標をより具体的にするなどの再構築が図られた。さらに、年間指導計画に盛り込みたい視点や単元計画の際に大切にしたいことについても気付きをまとめた。主な意見を次に挙げる。

(ア)「伝え合う」視点での学習活動の設定

- ・ペア活動や自分が行っていた作業を他の人に引き継ぐなど、友達とのやりとりが伴う協働作業を計画に盛り込む。
- ・1月の作業学習報告会(風のつばさレポート)を単元の一つとして明示する。その準備や発表の場を生徒が自分の思いや考えを言語化する必然的な場面として設定する。

- ・作業の進捗状況について、生徒が自己評価、他者評価し、互いに頑張り伝える時間を設定する。

(イ) 身に付けさせたい力を明確化した単元名

- ・作業学習を通して身に付けさせたい力を単元名に表し、教師だけでなく、生徒も意識して取り組めるようにする。(例:「販売会に向けて製品を製作しよう」→「規格に沿った製品作りのために自分の考えを伝えよう」)

これらのことから、作業学習本来のねらいや身に付けさせたい力を具体化させた授業設計が大切であるという意見が多く挙げられた。

エ 有効だった支援、手立てのまとめ

第5回学部研究会で、生徒の変容につながった有効な指導・支援を振り返った。今年度の授業研究会における授業参観や協議会での意見交換、指導助言を参考に、各班で行った取組と生徒の変容の報告があった。(表 2)

表 2 有効だった支援、手立てと生徒の変容 <12月>

有効だった支援、手立て	生徒の変容
<ul style="list-style-type: none"> ・ペアでの作業 ・生徒同士の協力が必要な製品や工程 	<ul style="list-style-type: none"> ・作業に必要な確認、相談を生徒だけで進められるようになった。 ・他者の意見にも耳を傾け、受け入れる姿が見られた。
<ul style="list-style-type: none"> ・役割分担の変更 ・生徒同士で役割分担するための話し合いの場の設定 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き継ぐことを伝えたり、新しい担当者が前任者に進め方を尋ねたりするなどの関わりがうまれた。 ・自分がやりたい作業を伝えたり、友達の意見を聞いたりするなど、相手を意識したやりとりができた。
<ul style="list-style-type: none"> ・教師の配置数の調整と支援の精査 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が自発的に質問や相談をするようになった。
<ul style="list-style-type: none"> ・規格に沿った製品、お客様に喜んでもらえる製品作りについて、生徒の意見をまとめた掲示物の制作 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人目標を考えるときや作業中に自分で見て、大切なポイントを再確認していた。

昨年度の課題として挙げられた「聞くとき、話すときのマナーの定着」についても、今年度の取組が有効に働いたことがうかがえた。意図的に生徒同士の関わりや教師への働き掛けが必要な場面を設定することで、適切な表現や態度、またはその生徒なりする方法で伝えること、友達の話聞いて同意を示したり、自分の意見を伝えたりすることが増えた。実体験を積み重ねることで、マナーや適切な態度が徐々に身に付いていくことが検証できた。

(2) 授業づくりの実際

<高等部 木工班 「ベジトラグ作り」>

【授業設計について～単元検討会の内容】

- ・ 年間指導計画の目標と、指導案の目標にずれが生じていたが、4月から作業に取り組んでみて、生徒の実態に沿った目標に変更した。
- ・ 昨年度の研究成果を生かし、伝え合うための工夫を取り入れていきたい。

【単元の目標】

- ・ 工程の中で担当する「作業のこつ」を身に付ける。
- ・ 効率のよい作業の仕方、清掃の方法を身に付ける。
- ・ 適切な目標を立てて取り組み、振り返りで目標を基に振り返る。

知 技
思 判 表
学 人

【研究授業】

□本時の目標（本時 19・20/32時間）

- ・ 「作業のこつ」が書かれた掲示物を参考にしながら、作業に取り組む。
- ・ 報告、連絡、相談で声を掛け合って、作業や清掃に取り組む。
- ・ 本時の反省やよかったことを基に次時の目標を立てる。

知 技
思 判 表
学 人

□主な活動

- ・ 本時の目標設定と振り返り
- ・ やすり掛け、塗装、組立の工程を分担し、ベジトラグを作る。
- ・ 声を掛け合い、分担して清掃する。

□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫	生徒の姿
・ 大型の製品作り	・ 押さえる、横から角度を見るなど、協力する場面が必然的に生まれた。
・ ペアでの活動 ・ 清掃場面での役割分担の設定	・ お互いの報告や相談など、相手に伝わるように伝える必要性が生まれた。

【授業研究会での主な協議内容と指導助言】

<協議内容から>

協議題「生徒同士で伝え合う姿を引き出す工夫について」

- ペアになることで、生徒同士のやりとりや自分の言葉で伝え合っている姿や、生徒同士の助け合いの場面が生まれていた。
- 作業のこつの内容を具体的にしたり、作業環境を整えたりすることで、より伝え合うことが増えるのではないか。

<指導助言から>

生徒の頑張る姿、教材・教具の活用、ペアでの活動がよかった。さらに、伝え合う場面を増やし、作業学習としてよくするために、望ましい「伝え合う姿」を出しておく、教師が生徒を見取る視点や意識を細かくもつ、成功体験として意識付ける、本時のめあて・振

り返りに伝え合いを入れることが考えられる。また、自立活動の視点から、こつを使った
らできた、困ったときに相談したら解決できたという経験を重ねていけたらよい。

【成果と今後に向けて～生徒の変容と有効だった支援の工夫】

<ペアでの活動>

誰に何を相談したり、報告したりするのかを整理して伝えることを引き続き支援する
必要はあるものの、ペアでの活動を設定することで、生徒同士が依頼したり、相談した
りして伝え合う姿を引き出すことができた。

<掲示物の活用>

掲示物の活用方法を適宜示すことで、自分から調べる、見に行く姿につながった。
また、清掃当番表を名前の付いたマグネットで何を担当するのか毎時間決められるよ
うにしたことで、自分たちで話し合っ分担しながら決めて、清掃を始めることができる
ようになった。

<作業内容を教示する機会の設定>

教育相談や見学の来客の際、作業学習製品についてや、自分の取り組んでいる工
程について生徒自身が説明したり、教えながら一緒に取り組んだりする機会を設定し
た。自分が何のために、何に取り組んでいるのかを整理したり、教えるからには自分のミ
スをなくすようにと責任感をもったりすることができた。

<やりとりの拡大>

作業学習の学びがやりとりを通してさらに深まるように、教師が間に入って生徒同士
のやりとりをしてきたが、生徒同士でやりとりしたり、まずは自分たちで解決しようと行動
したりすることが増えるようにしたい。そのために、安全面に配慮しながら教師の支援を
減らす、作業室の配置を変える、ペアでの目標を立てるなどさまざまな工夫を試みてい
きたい。



ペアでの活動～生徒同士の依頼
「次これをお願いします」



やすりがけのこつに沿って作業
～木目に沿ってやすりがけ



ペアでの活動～生徒同士の助け合い
「押さえてください」

<高等部 窯業班

「製品を作って販売しよう～横耀祭の作業学習製品販売会に向けて～」>

【授業設計について～単元検討会の内容～】

- ・ 単元目標について、道具の名前や作業工程の名称を入れ、窯業班ならではの目標にする。課題点だけに特化せず、よくできたところ、気を付けたことを言語化して伝えることができる目標にする。
- ・ 「オリエンテーション」「製品づくりをしよう」「販売準備をしよう」「販売会の振り返りをしよう」の四つの小単元で授業を進めていく。
- ・ 個々での作業だけでなく、生徒同士の共同作業を設定すると、教え合う場面も作れるのではないか。

【単元の目標】

- ・ 横耀祭の作業学習製品販売会に向け、成形やたたら伸ばし、やすり掛け等の精度を高め、規格に沿った製品を作る。 知 技
- ・ 作業工程の中で規格に沿った製品であるかを判断し、気を付けたことやうまくできたこと、よりよい製品作りのための気付きを教師や友達に伝える。 思 判 表
- ・ 使う人のことを考えた製品作りや販売、接客の仕方大切なことを考え、話し合い、実践しようとする。 学 人

【単元の概要】

本単元は、10月に行われる横耀祭の作業学習製品販売会に向けて、皿、箸置き、かまぐらの置き物の製品作りや販売会の準備に取り組む単元である。製品作りでは、お客様に喜んで買ってもらうことができるように、規格に沿った製品作りを目指し、正確に作業することを心掛けたり、保護者アンケートを参考に、使う人のことを考えた製品作りを目指したりしていきたい。また自分から質問をしたり、分からないことを相談したりして、課題を解決する力を育てたいと考える。さらにお互いの作業を見合ったり、感じたこと、考えたことを伝え合う場面を設定したりすることで、仲間との連帯感をもち、共同作業における相手との適切な関わり方を学ぶことができると考え、本単元を設定した。

【研究授業】

□ 本時の目標（本時 11.12/58）

- ・ 前時の振り返りを基に、作業の中で気を付けることを決め、規格に沿って成形をする。 知 技
- ・ うまく成形するためのポイントや気付いたこと、作業環境を整えるための報告や相談を自分の言葉で伝える。 思・判・表

□ 主な活動

- ・ 各担当に分かれて、製品の製作をする。（角皿、かまぐらの置き物、かまぐら箸置き）
- ・ 動画を見ながら、自分のよかった点や次に頑張りたいこと、友達のよかった点を伝え合う。

□「自分の思いや考えを伝え合う姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫	生徒の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・ 石膏型が無くなったことに気付き自分から報告に来ることができるよう、石膏型を一つのケースに6個ずつ入れて渡す。 ・ 生徒が自分の作業の様子を客観的に見ることができるよう、作業の様子の一部を動画で撮影する。 ・ 作業中のよかったこと、課題点などを教師がホワイトボードに書き込み視覚化する。 ・ 報告や相談を自分の言葉で伝えることができるように「どうしましたか」や作業の手が止まっていたら「次にやることは何ですか」と問う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 石膏型が無くなった際、「型をください」と自分から教師に伝えた。 ・ 振り返りの場面で動画を見た際、自分や友達の作業の様子を見て、自分の作業のよかったことや友達の作業のよかったことを教師や友達に伝えた。 ・ 教師がホワイトボードに書き込んだことを基に、振り返りを記入していた。 ・ 自分の作業について次の工程を自分の言葉で説明する姿が見られた。

【授業研究会での主な協議内容と指導助言】

<協議内容から>

- 教師が「～できましたね」と評価するだけでなく、「次はどうしたらよいかな?」「どうして成功したのかな?」と問い掛けることで、生徒が目標達成のために意識したことを自ら話せるようになり、次の主体的な学びへつなげる。
- 自己評価に使うシートの活用が効果的だった。
- 振り返りの場面で生徒が曖昧な表現ではなく、自分の考えを具体的な言葉で表現できるよう、教師が引き出す支援が必要である。

<指導助言から>

- ・ 環境設定について
物の配置、生徒が動きやすい導線、一人一人に合わせた治具が準備され、整った環境であった。作業室後方には製品の写真と価格が掲示されており、販売会を見据えた意識付けを含めた環境づくりは他の作業班も参考になる部分だと思った。
- ・ 自分の思いや考えを引き出す工夫
同じ作業、似た作業の担当同士でこうしたらうまくできたなど、うまくできるコツを教え合ったり、うまくできるための改善策を相談し合ったりする場面の設定をするとよい。質問してきた生徒に「〇〇さんが得意だから、聞いてみたら?」などと伝え、生徒同士が伝え合う、学び合うきっかけにつなげられるようにする。

- ・ ツールやその活用の方法などの検討
ホワイトボードに良い点や課題点を記入する手立て、タブレット型端末で動画視聴をする手立ての効果について検討してほしい。他の振り返りの方法として、小さいホワイトボードを個々に準備して成果や課題に関わる生徒の発言や教師の助言をその都度書き込み、振り返りの際に活用するという方法もある。また、動画の活用では、うまくできたときとそうでないときの複数の場面を撮って見比べ、客観的な自己評価や改善的な思考につなげていく方法も考えられるので検討してほしい。
- ・ 必要性から出てきた実感を伴った目標設定
規格に沿って成形することがなぜ大切か。その動機付けが最も大切になってくる。お客様アンケートの実施を本単元の始めに取り入れていたらどうだったか。購入者や使い手からの意見を参考に、既製品と比べてみるなど、規格に沿って成形することのよさや必要性を感じられる学習を行うことで、目標への理解や動機につながるのではないか。

【授業改善】

- ・ なぜ規格に沿って成形することが大事かについて生徒と話し合い、班内で共通理解し、話し合ったことを掲示物にまとめた。
- ・ 製品を使う人のことを考えた個人目標の設定を促す。
- ・ 自分の思いを伝える必然的な場面をつくるために、清掃分担などを相談する時間を設ける。
- ・ 教師の配置人数を減らし、常に教師が生徒の近くにいる状況を変え、生徒が自ら相談したり、協力したりする機会を増やす。



規格通りの厚さになっているか
ノギスで計測



協力して釉薬かけ

【成果と今後に向けて～生徒の変容と有効だった支援の工夫】

- ・ 教師の配置人数を減らしたことで、困り感に自分から気付いて、生徒が自発的に質問や相談をするようになった。今後も適正人数を職員間で検討し、授業を進めていく。
- ・ 「お客様に喜んでもらえる製品にするために」について生徒と考えたことを掲示したことで、作業中にポイントを意識して取り組むことができた。
- ・ 作業の様子を動画で撮影し、友達と見合うことで、自分の作業内容を友達に説明したり、友達の作業に興味をもって感想を伝えたりした。
- ・ 自分の思いを伝える必然的な場面をつくるために、清掃分担などを相談する時間を設けたことで、生徒同士で清掃分担を話し合っ決めて、自分の担当箇所が終わったら他の清掃箇所を手伝ったりするなどの関わりが見られた。
- ・ 「伝え合う」ことを相談や報告以外にどう広げていくかを職員間で検討し、3学期の風のつばさレポートに向けて自分の考えを話したり、発表内容を相談する時間を設定したりすることにした。普段の学習から生徒が自分の経験や考えを表現するための有効な手立てや支援についても考えていきたい。

3 研究のまとめ

(1) 成果

ア 生徒主体の学び合い

生徒同士の関わり、学び合いを生む活動や手立てを積極的に考え、実践した。「伝え合う」ことを意識して授業設計をしたことで、掲示物の工夫や生徒が考えたり話し合ったりする時間を確保することにつながり、教師主導から生徒主体の活動に変えることができた。その結果、生徒が活動や課題を自分事として捉え、話し合ったり助け合ったりするようになった。また、それらの関わりを重ねていく中で、話し方や聞き方など、コミュニケーションの基礎も身に付けることができつつある。

イ 年間指導計画の評価と改善

作業学習では、製品作りの知識・技能を身に付けるだけでなく、学習に向かう姿勢や卒業後の職場を見据えたコミュニケーション力の向上なども重要な視点である。今年度、年間指導計画に知識・技能面、態度面の両方の目標を単元名として明言化することの意義を再確認した。単元名に目指す姿を落とし込むことで、教師と生徒が、何を学ぶかをより具体的に共有することができた。

各班の年間指導計画は、学校行事との関連も含め、流れがほぼ確立されている。これまでは、「作業の基本を覚えよう」「販売会に向けて製品を作ろう」など、活動そのものや知識・技能面のねらいが単元名になることが多かった。日々の授業の中では、報告や相談、話合いにおける適切な態度などの指導が行われており、生徒も意識して取り組んでいる。そのような態度面における目指す姿も単元名に表すことで、段階的、計画的な指導につながることを職員間で共有できた。

ウ 学部職員の主体的な授業研究

作業学習の充実のために必要な情報の共有や話し合いたいことについて、高等部の職員が案を出し合いながら、学部研究を進めた。授業に直結する具体的な話合いができたことは、大変有意義であった。特に年度初めに目指す生徒の姿を共有し、目標を設定することから研究を始めたことは、学部の職員全員で、一年間の学習を支える土台づくりができたと言える。学部職員が、主体的に研究に関わり、支援について話合いを重ねたことで、生徒の変容を促すことができたと考えている。学部研究会を受けて、各班で作業日誌を作り直したり、授業改善が図られたりするなど、授業づくりへの意識がより一層高まった。

(2) 今後に向けて

ア より主体的な学びにするために

「伝え合う」ことを意識した授業づくりをしたことで、生徒同士の関わりが増えた。そこで、次年度以降はさらに生徒の主体的な活動につなげていきたい。現在、製品の製作に関わる相談や報告、清掃の役割分担のための話合いなどは行われている。今後は、報告をより正確に行ったり、生徒同士で課題解決をしたりすることなども期

待して支援していきたい。そして、作業学習にとどまらず、他の学習場面でも生かすことができる「伝え合う」力を身に付け、より主体的な学びへとつなげたい。

イ 年間指導計画・単元計画の一層の活用のために

年間指導計画や単元計画を日々の授業で活用する方法を考えていきたい。現在、年間指導計画は授業を行う教師間で共有され、一年間の流れや目標を確認したり、年度途中で見直しを図ったりする際に活用されている。今年度、単元名に身に付けさせたい力を表すことが生徒の意欲や学習の意義の理解につながることを確認した。年間の単元計画や目標を生徒とも共有する方法を考えたい。具体的には、段階的に学習活動が積み上がっていくことが分かるように、単元計画を教室内に掲示する、単元ごとの段階的な目標を生徒自身が立てるなどが考えられる。一年間の見通しをもって生徒が主体的に活動できるような活用方法を検討したい。

ウ 職員間の情報共有のために

今年度同様、高等部の職員から研究を進める上で必要なことを聞き取り、授業で活用できる情報を集めたり、意見交換をしたりしていきたい。作業班ごとに話し合いを行うことが多かったため、話し合いで出された指導や支援のアイデアを直近の授業で実践し評価することができた。一方、班を越えた情報共有が不足していたことが否めず、次年度、改善していきたい。話し合いで出された意見を共有する時間を設定したり、資料を回覧したりするなどし、学部研究が授業力向上のための学び合いの時間になるよう工夫したい。

「自分の思いや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり」という研究主題で2年間の研究に取り組んだ。昨年度は国語科の授業実践を通して各学部の発達段階に応じた言語環境や言語活動、教師の役割等の面で研究成果が得られた。今年度は各学部で中心的な指導の形態である生活単元学習と作業学習を通して研究を進めてきた。研究の過程において学校生活全体、学部間のつながりという視点をもつことで各学部の研究が連動し、全教職員の共通理解に基づいた研究成果と課題を得ることができた。

言語は物事を理解したり考えたり、他者に伝えたり、説明したりする活動の基盤となるものであり、情緒や感性、コミュニケーションの基盤でもあるとされている。教育活動においては、児童生徒が学習の見通しをもつことや、話し合い、発表、記録、報告、振り返り、まとめなど、個や集団での様々な学習活動において、各教科等の特質に応じた言語活動が展開される。

知的障害のある児童生徒にとっても言語活動の充実を取り入れた授業改善は思考力、判断力、表現力等を育むためにも重要であり、各教科等の目標や内容を実現する上でも有効な手立てである。

特に、知的障害のある児童生徒を対象とした教育課程において特徴的な指導の形態である各教科等を合わせた指導では、生活に根ざした体験的で実際の学習活動が展開され、実感を伴った言語の獲得や活用が期待できる。

本研究においては言語活動の充実のために、他者や集団との関わり、児童生徒が安心して自己表現できるような言語環境や言語活動に留意した。各教科等を合わせた指導では、他者や集団と関わる場面を意図的に設定し、個と集団の両面で言語活動が充実するような工夫・改善が可能である。自分の思いや考えに気付く姿、自ら伝えようとする姿、受け止めようとする姿など、一人一人の「伝え合う」に通じる姿が見られた。

研究の成果と課題については本紀要第一部と第二部のとおりであるが、その中でICTの活用に関する課題があげられている。実態に応じた日常的なツールとして活用が進むことで、授業でのより効果的な活用を目指したい。

授業設計については、年間指導計画や単元計画というスパンで捉えているか、単元の設定理由や指導計画は練られているか、他の指導の形態との関連性は図られているか等の観点で見直し、次年度以降も課題として考えている。

最後に、本紀要を御高覧いただいた皆様より、忌憚のない御意見、御指導を賜りますようお願い申し上げます。

研究に携わった職員（令和7年度）

校長 清水 潤 教頭 高橋 和恵 教頭 佐藤 貴子

事務長 川本 健太郎 教育専門監 朝倉 紀子

(小学部)

熊谷 淳 晴
高山 知 子
川崎 亜希子
高田 あづさ
若生 友 樹
大川 里香子 (研究部)
佐々木 麗 子
水谷 智 子
鶴田 美穂
内藤 稚 子
岩井 宏 樹
眞坂 糸 美
柴田 怜 子 (研究部)
藤平 裕 太
丸山 まゆ子
鈴木 陽
高橋 佳奈子
小山 耕 大
佐藤 玲 奈
佐々木 美穂子
進藤 由 衣
菅原 由紀子
菅原 美奈子
安達 由美子
和賀 典 子

(中学部)

堅持 夕 子
伊藤 由 紀
高橋 勝 美
鎌田 次 美
土田 優 子
佐藤 豪
佐々木 涼 子
高橋 暢 子
青木 真 一
後藤 ゆり子 (研究主任)
戸澤 寛 子
柴田 秀 幸
高橋 陽 美
守屋 美 (研究部)
高橋 典 子
室井 真 美
柿崎 英 之
小椋 トモ子
高橋 成 浩

(高等部)

柴田 豪
佐藤 恵
佐藤 尚 人
木村 栄 一
谷藤 弘 美
小西 ゆり子
池部 和 美
小棚木 明 子 (研究部)
大西 幸
菊池 牧 子
佐々木 祐
遠藤 奈津子
岩澤 有希子
佐々木 詠 吏
伊藤 歩 佳
山元 将 崇
高橋 誠
杳澤 直 樹
富樫 潤
森谷 寿 子
赤坂 千 春 (研究部)
大沼 美和子
三浦 真紀子

発行年月日 : 令和8年 3月19日

発行所 : 秋田県立横手支援学校

〒013-0064 横手市赤坂字仁坂105番地1

T E L : 0182-33-4166 (小・中学部) 0182-33-4167 (高等部)

F A X : 0182-33-4266 (小・中学部) 0182-33-4277 (高等部)

E m a i l : yokote-s@akita-pref.ed.jp

ホームページ : <http://www.yokote-s.akita-pref.ed.jp>